

イギリス自由党はなぜ没落したか

——一九二〇年代初頭のH・H・アスキスとロイド・ジョージ——

梅 津 実

- 一 二人の領袖
- 二 分裂そして憎悪
- 三 疑心そして和解
- 四 不安そして敗北
- 五 別 離

一 二人の領袖

イギリス自由党は、一九二〇年代初頭、波瀾にみちた時代のなかで没落した。第一次世界大戦直後のイギリスは一九一八年の総選挙につづき一九二二年、二三年、二四年と毎年のように選挙をくりかえし政治的混迷を重ねていたが、自由党はこの一連の不安定な状況のなかでジリジリと後退をよぎなくされ、周知のように一九二四年一〇月の総選挙で決定的に失墜したのである。一九一八年選挙終了時の下院において、「自由党」議員と称しうるものはそれでもまだ全部で一六三名を数えることができた。しかしそれから六年後の一九二四年、下院でわずか四〇名の少数政党に転

落した同党の姿をみて驚愕に堪えうる人はほとんどいなかったと言つてよかつたのである。この国の政党政治を歴史的に支えてきた伝統ある政党は、以後二度とふたたび「統治政党」として国民の前にあらわれることはない。自由党の没落は、一九二〇年初頭のイギリスがいかに時代転換に呻吟したかを象徴するものであつたけれども、同時にそれは、ちょうど巨大な落日にもたとえられるほど劇的な出来事であつたのである。

しかし自由党が新しい時代の波にのまれたと言ふ事實は、なによりも二〇世紀の同党を率いてきた二人の領袖の名とともに回想されなければならないであろう。その一人は、H・H・アスキス(H. H. Asquith)であり、もう一人はロイド・ジョージ(Lloyd George)である。少なくとも同党の没落は、この特異な個性をもつ二人の領袖の対立と、二人のどちらかに従つて集団をなしそれぞれ対峙しあつた黨員たちの深刻な葛藤とともに進化したからである。自由党は、この一九一八年―一九二四年におけるアスキス派とロイド・ジョージ派の分裂につづいて、のち一九三一年―一九三五年にもう一度、サミュエル(H. Samuel)派、サイモン(J. Simon)派、ロイド・ジョージと四人の眷属フアミリアール・メンバーの三派に分裂し政治勢力としてはほとんどとるにたらない断片的存在になつてしまふ。しかしいずれにせよ、自由党にとって憂鬱きわまりないこれら兩大戦間期の敗走が、一九二〇年代初頭におけるアスキスとロイド・ジョージの対決に端を發していたことは動かしがたい事實であつた。⁽¹⁾

それにしても、考えてみると歴史は皮肉なものである。大戦前「改革の政党」たるイギリス自由党を牽引し、その隆盛を印象づけたのはほかならぬこの二人の領袖であり、かれらのコンビネーションであつたからである。福祉関係の諸立法、土地問題に関するキャンペーン、積極的な対アイルランド政策、「人民予算」のための闘争、そして上院改革をめぐる貴族たちとの衝突など、⁽²⁾一九〇〇年から一九一〇年代にかけて自由党が掲げた政策やそのための急進

イギリス自由党はなぜ没落したか

主義的行動は、すべて車の両輪のごとき協力関係を誇るアスキスとロイド・ジョージのもとにあった。自由党は二人の指導者のもとに、いわば栄光につつまれていたのである。

それに、もともとアスキスとロイド・ジョージは——少なくとも表面上、政治家として同じような社会的環境のもとにそだち、同じような経歴を有し、同じような政治的見解をいただき、転換期の政党を指導するものとしては誰れがみてもお互いに信頼し協力しあえる恰好の条件をもっていたのである。

この点については、ステイブン・コス (Stephen Koss) の論文「アスキス対ロイド・ジョージ」 (Asquith versus Lloyd George: the Last Phase and Beyond) によりながら若干敷衍して述べてみると、こうである。(i)二人は、まずともにノンコンフォーマリスト (Nonconformist) の精神文化を背景とする地理的環境のなかにはぐくまれた。アスキスの場合はヨークシャーの小さな町モーレー (Morley) に生れ、のち下院議員としては一貫してスコットランドの選挙区に地盤をおいた。ロイド・ジョージは北ウェールズの寒村ヒラヌエスタムドヴィ (Llanstunndwy) に育ち、政治的にも終生北ウェールズを基盤とすることをやめなかった。いずれもノンコンフォーマリストの強い地域であった。(ii)また二人は、どちらも片親がなく少年時代から苦節を強いられた。アスキスはまだ若い三五歳の父に亡くなられたあと、資産もなくしかも病弱である母や兄などともに伯父をたより転々として育った。ロイド・ジョージも、生後わずか一歳半のときに教師である父に死なれ、カーディガン湾を臨むヒランヌエスタムドヴィ村で小さな靴屋を営む伯父に育てられた。両者ともその辛酸を通じて、大衆の心がなんであるかを知るに充分すぎるほどの境遇にあったのである。(iii)したがって二人は当然のことながら下積みから法律家になり議会入りをはたしたのだが、その際強調しなければならぬことは、不敵なことに両者とも何らの社会的なコネや家族の後ろ楯やまた財力をもたず、ただ自己の

才能と雄弁だけで既成社会のハイアラーキーに挑戦し、その階梯を歩一步のぼっていったと言うことである。アスキスは大変な秀才であり、奨学金をえてオックスフォード入りをした。ロイド・ジョージの場合はほとんど独学に近く、オックス・ブリッジとは無縁であったが、しかし類い無き実力を蓄えていた。かれらがのちに国民の前に急進主義の旗を掲げるのもある意味ではまことに自然であったと言えよう。(iv)それにかれらは、趣味や個人的関心についてもまた似かよったものをもっていた。ロンドンにきてはじめて知った後期ヴィクトリア文化の華やかさに目を見張った二人は、興奮してそのありさまを家族に手紙で知らせているが、二人ともサヴォイで上演されているギルバート・アンド・サリバンの「ザ・ミカド」(The Mikado)に夜ごとかよいつめ、熱烈な拍手喝采をおくったりしている。そしてのちにはどちらもゴルフ狂となるのである。このようにして、アスキスとロイド・ジョージは同じような経歴のもとに社会に登場し、同じような考えをもちうる立場にあった。ロイド・ジョージよりアスキスの方が四年はやく下院議員となり、かつフロント・ベンチにも早く席をえることができたと言う違いはあるけれども、両者が互いにその才気を愛し、議会人としてお互いの権威を尊敬しえたことについては、別に何の不思議もなかった。⁽³⁾二人が決裂し対決するなど、誰れにも想像できなかったにちがいないのである。

それでは、二人はどのようにして互いに信頼関係を失い、どうして最後には互いに憎悪するまでにいたるのか。これは大変に興味をそそる問題である。しかしこの設問に答えることは、実際にはきわめて難かしい。と言うのは、すでに右に述べた事からも推察されるように、両者は具体的な政策でこそ若干の違いをみせたにせよ、しかし掲げた基本的な政治抱負や自由党の原則的立場からして別に重大な相違点をもつと言うわけではなかったし、したがってその対立の原因をさぐるにしても、さしずめ権力の座をめぐる確執の心理など、きわめてあいまいな領域に踏み込まざるをえない

いからである。

けれどもアスキスとロイド・ジョージには、やはり両者を分かつ決定的な要素があったと考えなければならぬであろう。それは、よってたつ「原則」に関する相違でなく、むしろ政治に対する発想や姿勢の違い、あるいは政策実現にいたる方法の違いなど、主として両者の政治的スタイルにかかわるものであった。これが結局は二人の疑心をよび決裂にまでいたらせる一つの重要な要因となるのである。⁽⁴⁾ とりあえず、ここではふたたびS・コスの示唆するところに従うと、それは次のように考えられよう。すなわち、実はアスキスは現実の政治の場ではあくまでも既成の組織の枠組のなかで問題を考え、従来からの行政様式にのっとりそれを処理しようとした。だからたとえば、ある種の慣習にもとづき人々の意見をまとめたり、またいついかにして妥協するかなどと言う呼吸のうまさに関してはかれの右にでる者がいなかった。その意味では、アスキスは昔からの上流社会の政治的伝統を代表する典型的人物として人々に映ったのである。しかしそうしてとられた政治的手法は、しばしば因襲的な性格を帯びる。それゆえアスキス・イメージには、政治にとって重要なひたむきな情熱が欠除し、またその政治的反應に関しても何かきわめて鈍重であると言う印象がつきまとった。ところがこれに反して、ロイド・ジョージは、どうみてもつねに反逆児的でありかつ革命的であったのである。アスキスとは逆に、ロイド・ジョージの場合はむしろ、いつでもいかにして先例や慣習をやり取り政策実現をはかるかに腐心していたと言つてよい。だからその政治的スタイルも、大胆に言えば一種靈感のようなものにつき動かされて状況を乗り切つてゆくと言つてよい。そうした特徴をもつていた。もとよりこうした政治指導のありかたにつねに不安定さがつきまとうことは言うまでもないが、しかし社会的振幅が激しく揺れ動く転換期にあって、必ずしも先例にとらわれない柔軟さが要求されるような場面でこの方法はきわめて有効であった。その意味

で、ロイド・ジョージは現実に抜群のリーダーシップを發揮したし、また決して他の追隨を許すものではなかったのである。いずれにせよ、二人にはこれだけの違いがあった。⁽⁵⁾かれらはたしかに同じ政治的原則を掲げている。それだけでなく、「政治家」としてもまた多くの共通点と類似性をもっていた。しかし現実の政治の場にのぞむや、かれらはいっしか決定的に対決する宿命にあったと考えるのが妥当なのである。

一九一六年から一九一八年にいたる、いわば「分裂前史」とでも呼べる時代の二人の衝突の数々に関しても、この政治スタイルの違いと言う視点は多くを説明してくれるように思われる。まず両者の指導者としてのタイプの違いは、大戦と言う「危機」的状況に直面してたちまち露呈する。そしてこのことは、ロイド・ジョージによるアスキスからの首相職篡奪と言ういわゆる「一九一六年一二月の政変」をひきおこし、二人の間に、はじめて越えがたい深い溝をつくることになる。⁽⁶⁾さらにこの「一九一六年一二月の政変」以降、アスキスとロイド・ジョージは、一九一八年にいたる二年の間さまざま問題をめぐり対決を色濃くする。それらの内容を順をおって記すと次のとおりである。(一)ラズダウン卿 (Lord Lansdowne) の主張する対独和平交渉問題をめぐる対立(一九一六年以降)。(二)対インド綿製品輸入税賦課をめぐる対立(一九一七年三月)。(三)国民代表表ザ・リブレゼンテーション・オブ・ザ・ピープル・ビル法の改定条件をめぐる対立(一九一七年一月)。(四)対アイルランド徴兵制をめぐる対立(一九一八年四月)。(五)徴兵制ミリタリー・サービス・ビルをめぐる対立(一九一八年四月)。そして、(六)「モリス討論」をめぐる対立(一九一八年五月)である。⁽⁷⁾みられるように、これら対立の内容は、一・二の例外はあるにせよ和平交渉問題から「モリス討論」にいたるまですべて戦時下の軍事政策に関するものであった。戦争に勝つための果敢な指導が要求された特殊な状況において、これらの争点は二人の領袖の政治スタイルの違いを浮き彫りにする恰好の素材であったのである。もっともこの時期の自由党の分裂の原因には、C・クック (C. Cook)

も指摘するように一面においてどうしようもない不鮮明さがつきまとっている⁽⁸⁾。また実際問題として、アスキスは右の争点の一部に関しては少なくとも公式には旗幟を鮮明にしなかったと言ふこともあり、かれのロイド・ジョージに対する態度には、つねに非常なあいまいさが伴っていた⁽⁹⁾。しかしそれも結局は、二人の対決が自由党の原則にかかわるものではなく、むしろ両者の政治指導のタイプの違いにもとづくものであったからであるように思われるのである。この意味で、一九一八年にいたるまでの二人の抗争の内容はすべて「一九一六年一二月の政変」のバリエーションとして展開された、と言っても過言ではなかった。しかしいずれにせよ、これらの問題の処理をめぐって両者の確執が次第次第に深まったのはたしかであった。

二〇世紀イギリス自由党の最大の切り札的存在であった二人の領袖は、党内外の期待を一身にうけながらも実はこうして互いに対立を重ね、みずから自由党内に大きな亀裂をもたらすことになるのである。二人は、この「分裂前史」につづいてさらに自己の周囲に派閥的に自由党政治家群を蝟集させし⁽¹⁰⁾ばらくは決して戈をおさめることをしない。大戦直後の最も重要な時期に党を分裂させ、自由党没落の責任を負うことになるのである。もとより「分裂」と「没落」の原因を、すべてこの二人の政治家の個人的対立の次元に求めることは明らかに問題がある。自由党政治家たちがときに結束し、ときに敵対し、離合集散をくりかえしながら没落へ向ってゆくのは、おそらくその背後にあって激しく転換する社会・経済構造がつよく影響するものと思われるからである。したがって自由党の没落は、言うまでもなくまずそうした背景との関連で考察されなければならないであろう。現に最近の歴史家は、ほとんどがこの点を視野に入れて問題を論じているようである⁽¹¹⁾。しかし、状況にたちおくれ一人没落に向う自由党の苦悩は、また二人の指導者の相剋と葛藤のなかにもひとつひとつシンボライズされるにちがいない。アスキスとロイド・ジョージは一九二〇

年代の初頭に指導者として一体どのようにしてその対立を一挙に噴出させるのか。さらに、それを通じてイギリス自由党はどのように没落への道をたどるのか。社会・経済構造との関連でこの問題を追跡するのは別の機会にゆずるとして、⁽¹²⁾とりあえず本稿ではこれが以下論ぜられるべき問題である。

二 分裂そして憎悪

大戦の勃発以来アスキスとロイド・ジョージはたえず衝突しあったが、しかし面白いことに、どちらかと言えばアスキスの方にはいささか「対立」を楽観視し、事態のゆくえを甘くみる姿勢がうかがえた。一九一八年一月の段階にいたっても、アスキスは戦後処理に関しては自分こそが何らかのイニシアチブを発揮しうると信じ、袂を分ちあつたはずのロイド・ジョージに、平和条約締結のイギリス代表として自分をヴェルサイユに派遣するよう申しでたのである。何かと自分に気をつかう国王の励ましもあって、かれは「ウィルソン大統領は世界でわたしが会って話してみたいと思うごく少数の人間の一人である」⁽¹³⁾ことを吐露し、このむねを率直にロイド・ジョージに表明した。しかし事態はそれほど甘くはなかった。ロイド・ジョージとしても、戦後処理の最優先事項たる平和条約締結をいまさらアスキスにゆだねるわけにはゆかなかつたに相違ないのである。アスキス夫人マゴット (Margot Asquith) のいささか感情的な回想によると、この申しでをうけたロイド・ジョージは「部屋のなかを行ったり来たり……あわてて時計をみたりしたが……申し出に対しては、考えてみましょうと言ったきりであった」⁽¹⁴⁾アスキス自身のどこかに潜んでいた思い違い、あるいは幻想は、少なくともこの時点でみごとに打ち破られたのである。いわゆる「クーポン選挙」が行なわれたのはこの直後であった。

総選挙は、一九一八年一月二五日の議会解散につづいて二月一四日に挙行された。大戦をはさむ実に八年ぶりの選挙である。そこで自由党との動向との関連でこの選挙をみるとき、重要な点はなによりもロイド・ジョージがこの時点ではっきりと保守党と連合し、自由党ロイド・ジョージ派 (the Coalition Liberals) と保守党からなる政治ブロック、すなわち「連立内閣」派を形成したことであった。ロイド・ジョージは自由党アスキス派 (the Liberals) との対決を決断し、あえて自由党の分裂も辞さなかったのである。しかも「連立内閣」派は、必勝をきして現職の首相たるロイド・ジョージと保守党党首ボナ・ロー (Bonar Law) 署名入りの公認証書を自派の候補者だけに配布し、自由党アスキス派はもとより労働党など野党各陣営の輦蹙を買った。アスキスもまたこれに激怒した。戦時中の配給キップを思いださせるように、アスキスはこの公認証書をクーポン (coupon) と命名して⁽¹⁵⁾ 揶揄し、選挙戦を通じて激しいロイド・ジョージ批判をぶつけるにいたったのである。

たしかに考えてみると、アスキスとロイド・ジョージの衝突はもともとは戦争遂行をめぐる軍事政策に関して行なわれたものであった。だから戦争が終結したいま、ロイド・ジョージは自由党に帰ることも可能であった。つまりもう一度アスキスと手を携えて党再建に尽力し、保守党と敵対することもできたのである。しかしロイド・ジョージは自由党へはもどらなかつた。逆にかれば保守党と「連立内閣」派を形成して、かつての同志たちと対決する道を選択したのである。後世の人々がみなこの選挙を「クーポン選挙」と呼んで——もとより真相は決してこれほど単純ではなかつたのだが——一九一八年におけるアスキスの苦境に思いを馳せたゆえんであった。⁽¹⁶⁾ 一二月二八日の開票とともに明らかになった総選挙の結果をみると、アスキス派は惨憺たる状態を呈し、事態はロイド・ジョージの思惑通りにすすんだかのようにであった。ロイド・ジョージ派は一二七議席を獲得したのに対して、アスキス派は労働党の獲得議

席数五七を下まわる三六議席をえるにとどまったのである。それだけではなかった。自由党は「連立内閣」派に走ったロイド・ジョージとW・チャーチル(W. Churchill)を除いて、閣僚経験のあるそうそうたる指導者群——すなわち、R・マッケナ(R. McKenna)、W・ランシマン(W. Runciman)、J・サイモン、H・サミュエルなどのほとんどをこの選挙で失ったのである。そして最も強調されなければならないことは、三二年間無敗を誇ったスコットランドのイースト・ファイフ(East Fife)において、なんと領袖アスキス自身が無名の一保守党員に打倒され一敗地にまみれたということであった。アスキスのなかにまだあったロイド・ジョージに対する淡い期待のようなものは、この選挙を通じて音をたてて崩れさったのである。⁽¹⁷⁾

アスキスは深い失望の淵に沈んだ。かれの落選を目撃して驚いた多くの有識者や政治家たちは、かつてアスキスが一九一六年一二月にダウニング街一〇番地を追われたとき以上の同情をよせたと言われるが、⁽¹⁸⁾しかしたとえどのような同情を受けたとしても、アスキスにとって敗北は敗北であった。年があけてすぐ、かれは南仏にホリデーに行き、傷心の身を癒す。またスペイン、イタリーを歴遊、招かれてライン駐留の英軍におもむいたりもする。⁽¹⁹⁾しかし議席をうばわれた政治家アスキスが、それらによって簡単に癒されるはずはなかった。選挙が終ってからの半年間、つまり一九一九年の前半には、かれはほとんど政治的演説の機会をもたず、党とは無関係の会合で、わずかに二・三度発言したにすぎなかった。ただ旅行と読書と執筆にあけくれるばかりで、公的な行事や宴会にもめったにその姿をみせなかったのである。⁽²⁰⁾おそらく、かれの日々は鬱々たるものであるにちがいがなかった。

しかしアスキス個人の感傷とは別に、アスキス派幹部たちは選挙後ただちに政治的反撃の体制を固めた。落選したアスキスに代って、かれらは一九一九年二月三日アスキスの最も忠実な腹心の部下たるD・マクリーン(D. Maclean)

を自由党下院議員団長に選出、また幹事にはG・R・ソーン(G. R. Thorne)とJ・M・ホッジ(J. M. Hogge)を選んで自派の団結を確認したのである。⁽²¹⁾かれらはみずからを‘Wee Frees’⁽²²⁾と称してロイド・ジョージと同派に対する敵意をかくさなかった。二日後の二月五日には、ロイド・ジョージ派が「統一自由党」維持の道を摸索して全自由党議員総会を召集したが、当然のことながらアスキス派はこれにまったく冷やかな態度しか示さなかった。⁽²²⁾このち、二月から三月にかけて、両派は分裂回避をめぐる頻繁に会合を重ねる。けれども、いくら会合や交渉を繰り返してもアスキス派の態度はすでに手のつけられない状態になっていた。かれらは「裏切り者」と協力するよりはむしろ党の分裂を望んだのである。⁽²³⁾同派の指導層には、D・マクリーンのほかE・グレイ(E. Grey)、J・サイモン、W・M・R・プリングル(W. M. R. Pringle)、W・ベン(Wedgwood Benn)、カウドレイ(Lord Cowdray)、バックマスター(Lord Buckmaster)、グラッドストーン(Lord Gladstone)、R・ハドソン(R. Hudson)、G・ハワード(Geoffrey Howard)、V・ヒリップス(V. Phillips)などがまだ健在であった。⁽²⁴⁾いずれも、依然として戦意を失なっていなかったと言えよう。もとより、こうした上・下両院の議員団の分裂はただちに自由党組織の全国的な分裂を意味するものではない。しかし実際問題として、自由党はほぼ「分裂」の道を実に一步ふみだしたと言って間違いではなかった。⁽²⁵⁾

一方、現実主義者ロイド・ジョージには、一八年の選挙中から状況がこのように破局に向って進むことをあらかじめ冷徹に予想する節がみられた。一九一八年二月一三日にかれは言っている。保守党は選挙で二〇〇議席以上の獲得を期待しているようだが、自派つまりロイド・ジョージ派については一二〇議席以上とれば、満足しなければならぬ。さらに将来、争点が明確になるように「アスキス派よりは労働党が多数を占めることを、わたしは望

「む」⁽²⁶⁾と。たしかに、アスキス派切り捨て策はかれの予定表に記された重要項目の一つであるように思われた。ただ、このようなアスキス派切り捨ての決断も、実はロイド・ジョージがアスキス派との和解の可能性をさぐり、政策でも人事のうえでもさまざまな妥協と譲歩をかさね、しかもすべてアスキスに拒絶されたうえではじめてなされたものであることを忘れてはならないであろう。⁽²⁷⁾ クーポンも、こうした努力が失敗した後に配布されたのである。それにロイド・ジョージによるクーポン配布には、「自由党」の全体的凋落の避けがたいことを察知したロイド・ジョージが、自由黨員と名づくものをすこしでも救済しようとするそうした配慮も込められていた。⁽²⁸⁾ 事実はこの通りであったのである。しかし自由党分裂の原因に関連して議論を進めるとき、むしろこれによって、ロイド・ジョージが免罪符をえることができるかどうかについては疑問も残ろう。かれが心中ひそかに「自由黨員」の当選を期していたとするなら、クーポン配布をすこしでもアスキス派候補者に拡大する姿勢をみせることもできた、と考えられるからである。⁽²⁹⁾ しかしかれはあえてそれを無視した。むしろ自覚して党分裂に追い込んだのである。

そのうえ勝利を手中にしたロイド・ジョージは、選挙後ただちに山積する内外の懸案事項の処理に没入し、自由党の再統一問題などには一顧だにする様子もみせなかった。一九一九年の前半を通じて、アスキスが陰陰滅滅たる状態にあるとき、ロイド・ジョージはどちらかと言えば華やかなスポットライトをあびていたのである。かれは歴大な数の官僚・学者を指揮し、パリを舞台に平和条約のための交渉を精力的に展開していた。むしろ賠償問題や軍縮問題などは、どれをとっても簡単に処理できる性質のものではなかった。またかれは交渉の過程において幾度もゆきづまっている。しかしロイド・ジョージは誰れがみても明らかに「ヨーロッパの首相」として君臨しており、国内における権力者としての地位もまた確固として揺ぎなかったのである。⁽³⁰⁾ 自由党の分裂問題など、実に遠いかなたの瑣事である

にちがいがなかった。それにロイド・ジョージ派の指導者たちも、いまやそれぞれ閣僚の座にあって多忙をきわめており、統一自由党の摸索にそれほど執着できる立場になかった。W・チャーチルは陸相として権勢をふるっていた。C・アディソン (C. Addison) は住宅問題にかかわっていた。そして同じく同派のT・J・マクナマラ (T. J. Macnamara) やA・モンド (A. Mond) は失業問題に、H・A・L・フィッシャー (H. A. L. Fisher) は教育問題に、そしてM・モンタギュー (M. Montagu) はインド問題にそれぞれ忙殺されていたのである。⁽³¹⁾ さらにF・ゲスト (F. Guest) やC・マカーディ (C. McCurdy) などの党実務家グループをとりあげても、またP・ケアー (P. Kerr) やE・グリッグ (E. Grigg) やW・サザーランド (W. Sutherland) などいわゆる『ガーデン・サブグループ』 (Garden Subgroup)⁽³²⁾ を構成するロイド・ジョージの側近グループに目を転じてみても、いずれも首相に密着して行動しており、自由党の統一に努力する気配はうかがえなかった。かれらが現実の行政を指導する立場に埋没して自由党の分裂回避に情熱を注がず、実質的には「保守党の囚虜と化し」⁽³³⁾ ていたと非難されたとしても、それはある意味でやむをえないことかも知れなかった。

ところで、アスキスが総選挙敗北の衝撃を払拭し公的にたちあがったのは、一九二〇年の新年、グラスゴー近郊におけるペイズレー (Paisley) 補選に打ってでたときである (投票日は同年二月二二日)。かれには一九一九年一二月にもヨークシャーのスペン・ヴァレー (Spenn Valley) 補選で立候補する機会があった。しかしアスキス派の幹部たちは同地区での厳しい情勢を分析、領袖の敗北もありうることを考慮してアスキス擁立を断念した。かわりにスペン・ヴァレーに打ってでたJ・サイモンは、同派の危惧どおり落選のうきめをみなければならなかった。⁽³⁴⁾ ペイズレーでも、アスキスははたして実際に受け入れられるかどうか、そうした不安材料は依然として山積していた。だがアスキ

スは、妻マゴット、長女ヴァイオレット (Violet)、それにかれの秘書役をつとめるV・ヒリップスなどをひきつれペイズレーに乗り込み、グラッドストーンのミドロシアン・キャンペーンを想起させるような華やかな選挙戦を展開し、対立候補の労働党員J・M・ビッグー (J. M. Biggar) を打ち破ることができたのである⁽³⁵⁾。

ペイズレー補選で父に同行したヴァイオレットは、このとき街頭で一人雄弁をふるい群がる有権者をうならせたと言われている。この長女の活躍についての父アスキスの回想によれば、それはたとえば左のとおりであった。「ロイド・ジョージ氏とわたし (アスキス) 自身が同じ演壇にあるときには、まるでライオンが子羊を前にしているようだと保守党や労働党のあらゆる捜し屋たちがたとえている、まずこう彼女は言った。どちらがライオンでどちらが子羊なのかについて、彼女はあえて触れなかったけれどもつづけて彼女は次のように言ったのである。『ロイド・ジョージさんにこんなにも食欲がなく、わたしの父がこんなにも食べられそうにもない様子をわたしはこれまでみたことがない、このことだけは言えます』⁽³⁶⁾と (カッコ内は引用者、以下すべて同じ)。ロイド・ジョージを意識して政治復権をはかろうとするアスキスとその家族の願いが彷彿とするようであろう。しかしこうして勝利をえ、大群衆の見送りをうけ得意になってロンドンに帰ったアスキスは、ウエストミンスターでは冷やかな歓迎しかうけなかった⁽³⁷⁾。ことにロイド・ジョージは、当然のことながらアスキスに勝利を祝福するメッセージなどまったく送らなかったし、ロイド・ジョージの秘書F・ステイヴンソン (F. Stevenson) もまた、アスキスの当選に非常な当惑と不安をおぼえそのことを率直に日記に記した⁽³⁸⁾。ロイド・ジョージ派の人々もただただ「石のような沈黙」をみせるのみであったのである⁽³⁹⁾。アスキスの復帰は、言うまでもなくそれだけでは自由党の分裂問題の解決にはつながらない。むしろその逆であった。しかしアスキスは、もう一度政治の中央に帰ってきたのである。何らかの波瀾がおこる可能性はあった。

イギリス自由党はなぜ没落したか

だが意外なことに、議会復帰後のアスキスは実は著しくその指導力を喪失していたのである。この当時のアスキスは人々の期待に反し、実際にはいつも酒ばかり飲んで愚痴ばかり言い表面的な威厳だけをとりつくろった哀れな人間であったと言う厳しい批判も受けている。⁽⁴⁰⁾ロイド・ジョージの秘書、F・ステイヴンソンはアスキスの政治復帰を内心誰れよりも恐れていたが、しかし彼女の表現によれば、下院に帰ったアスキスは驚くべきことに「湿った導火線」となっており、かれはもはや終わっていたのである。⁽⁴¹⁾一九一八年総選挙の敗北によって「政治家」アスキスの運命は大きく狂い、ペイズレー補選出馬にもかかわらず、かれの実像は依然として敗北の感傷のなかに沈没していたのかも知れない。たしかにそのアイルランド問題に関する激しい演説にもみられるように、アスキスは議会に復帰してのち、かつてみられないほど幾度も政治的発言の機会をえた。しかしその演説たるや、聞き手にはしばしば内容のない饒舌とうつり、はなはだ迫力を欠くものであった。⁽⁴²⁾それに大体アスキスは、このペイズレー補選前後から翌二一年にかけて政治戦略の基本的な点で挫折をよぎなくされる。かれの指導力の低下を語るとすれば、この点との関連も無視することはできないであろう。(一)たとえば、かれが考えていたアスキス派自由党と労働党の提携による次期政権樹立構想は、労働党に問題にもされない。(二)そこでアスキスは、E・グレイやR・セシル(R. Cecil)との提携強化による党再建策を考えるが、これもR・セシルにE・グレイの党首就任を条件とすることを逆提案されるため涙をのまざるをえなくなる。つまりアスキスの政治路線はいたるところで行き詰まり、それゆえに自由党内においても指導部は現実にアスキスのもとにあるのかグレイのもとにあるのか、はたまたセシルが掌握しているのかかわらないと言った混沌たるありさまになるのである。⁽⁴³⁾これが当時のかれのいつわらぬ立場であった。こうして敗北のアスキスは次第に泥沼に入り指導力を失い、いわばかろうじて自由党の残党を率いている感がなくなかったのである。アスキスの情

熱と言えば——妻マゴットがかれの背後にあって「ロイド・ジョージと言うのはいつも卑怯なふるまいばかりしているのよ⁽⁴⁴⁾」と囁きつづけたこともあって——ペイズレーでの華やかな復帰にもかかわらず、実はただ酒をあおりロイド・ジョージへの憎悪をつのらせることだけだったようである。二一年二月一七日かれは言っている。「わたしは一時間あまり下院でロイド・ジョージの演説を聞いた。大げさな誇張だらけのまったく独特な身ぶり手ぶり。そして卑屈な取り巻きどもによる大きな拍手喝采。下院と言うところはなんたるところだ⁽⁴⁵⁾」。アスキスはあくまでも悲劇のなかにあったのである。

それゆえ、アスキスがみずからイニシアチブをとって政治的波瀾を巻き起す可能性は、実際問題としてはそれほど大きくなかった。しかしそれでは、このように指導者として不安定な境遇にあるアスキスと比較して、ロイド・ジョージの方はあくまでもその堅牢な政治的基盤を誇れる立場にあったのかと言うと、実はこれまた必ずしもそうではなかったのである。アスキスのそれとは違った意味ではあるけれども、ロイド・ジョージもまた、一種の指導力の危機に直面していたと言つてよいであろう。それはこうである。すなわち一九一八年以降、ロイド・ジョージが自派の自由党議員と保守党議員を政治勢力として擁し、「アメリカ大統領」にもおとらぬ権勢⁽⁴⁶⁾を振つていたのは事実であった。しかし一八年の選挙の結果が示すように、もともと自由党ロイド・ジョージ派(一二七議席)と保守党(三三二議席)の実力は議員の数からして桁違いであり、したがって自分を支える政治勢力と言つてもそれはきわめて不安定な構造からなりたっていた。つまりロイド・ジョージも、つきつめてみると結局は保守党の大部分と自由党の一部によるいわば「不安のバランス」のうえに立脚していたのであった。しかもこのバランスの崩れる危険性は、重要な政治的争点の山積するこの時期においては、政局のいたるところに存在していたと言つてよい。そしてこのことを誰れより

も痛切に感じていたのは、ほかならぬロイド・ジョージ自身であったのである。

そこでロイド・ジョージは、改めて自己の支持基盤をみなおし、それを根本的に改変する必要にせまられた。「中央党」(the Centre Party) または「国民党」(the National Party) とよばれる中道右派政党結成の構想を、一九年中頃から二〇年の初めにかけてさかんに追求したのも、以上のような状態に立たされていたかれの指導力強化策の摸索の結果にほかならなかったのである。⁽⁴⁷⁾ すなわち、現行の「連立内閣」をあくまで維持すること、さらにその支持母体たる保守党の一部と自由党ロイド・ジョージ派を合同させ、「新党」にまでいたらせること、ここにこそロイド・ジョージは自己の政治的活路をみいだそうとしていたのである。⁽⁴⁸⁾ ところがこの構想は、領袖の意に反して、「自由党」と言う名称を保持することにこだわりつづけるロイド・ジョージ派自体の内部の反対にあい宙に浮いてしまった。⁽⁴⁹⁾ ロイド・ジョージの苦肉の策も挫折せざるをえなかったのである。こうしてかれも大変な不安と焦躁にかられつづけた。かれの前には、二〇年三月のアスキス派による全面的宣戦布告とそれに同年五月の——ヤジと怒号で大荒れに荒れたけれど——N・L・F・レミングトン大会 (the general meeting of the National Liberal Federation at Leamington) にみられるような反ロイド・ジョージ派の大合唱があった。⁽⁵⁰⁾ そして後には、いつ離反するかわからない保守党の不気味な存在があった。ロイド・ジョージは、かくして現実にはきわめて危険な政治的綱渡りを強いられており、アスキスとは違う意味ではあるが、しかしその指導力もまた、非常に不安定な状態におかれていたと言って決して過言でなかったのである。

さて、こうしてみるとアスキスとロイド・ジョージは一見いつでも調整できるかに思われる政治スタイルの違いから軋轢を重ね、一九一八年の総選挙以降から二二年頃にかけて対立を深めながらも、しかしいつのまにかみずからの

足下を突き崩し次第にその指導力を失うことになったのだ、とすることに気づくことができよう。これは大変な逆説ではあるまいか。おそらく、こうした事態がくることを少なくとも一九一八年当時の二人は、予想だにしなかったにちがいないからである。けれども現実はいかんともしがたく、こうした傾向は二人の領袖が個人的に抱いている「自信」とは関係なく、なお二二年一〇月のロイド・ジョージ「連立内閣」崩壊の瞬間まで増幅されてゆくのである。その際、二二年から二二年にかかる状況において注意されなければならない問題点は、さしづめ次の三点であろう。

まず第一に、右にみたように現実にアスキスとロイド・ジョージが指導者として不安定な状態におかれていると言ふこと自体は、逆に自由党分裂の固定化促進要因となったと言ふことである。たとえばアスキスは、二〇年五月のN・L・F・レミングトン大会以後、自由党の各種組織からロイド・ジョージ派と名づく者をすべて一掃することに成功し、二二年二月までにはウェールズを除くイングランドとスコットランド地区の自由党組織をほとんど掌握した。ロイド・ジョージ派の牙城ウェールズでもW・L・F (Welsh Liberal Federation) を創設することができたのである⁽⁵¹⁾。これに対して、すでに「新党」結成の望みをたたれていたロイド・ジョージも対抗上独自の組織を作り独自の宣伝媒体をもつ必要にかられた。前者は二〇年の中頃から各地に形成され、二二年一月に「国民自由党」(National Liberal Party) とよばれる組織として結実⁽⁵²⁾、後者はアスキス派の『リベラル・マガジン』(The Liberal Magazine) に対抗する『ロイド・ジョージ・リベラル・マガジン』(The Lloyd George Liberal Magazine) として刊行されたのである⁽⁵³⁾。両派はもはや引き返せないところまできていた。しかし第二に注意しなければならない重要な点は、右のような分裂の固定化と言う事態を契機として、この時期に人々の「自由党」に対する幻滅感が急速に拡大し、多くの有名・無名党員の自由党離脱をみるにいたった⁽⁵⁴⁾と言ふことであろう。なるほど党組織は、一応整合的に二分化した。

イギリス自由党はなぜ没落したか

しかしその内容たるや注意して詳細にみると組織率の点からみても志気の点からみても実にお粗末であり、分裂は必ずしも黨員たちのそれぞれの組織に対する忠誠心の強化にはむすびつかかなかつたのである。ある者は党の将来に見切りをつけ保守党に入党したし、ある者は自由党の知的墮落とブルジョア化への傾向をみてとり労働党に走った。⁽⁵⁶⁾「自由党」はまさに解体化しつつあつたのである。しかも繰り返すことになるが、アスキスもロイド・ジョージも、基本的にはこうした状況の流れをくいとめることができなかった。つまり自由党の領袖はもはやいずれも状況を動かせる状態にはなかつたと言ふこと、これが第三に指摘しなければならぬポイントなのである。党分裂は進行する。しかし一九二二年で七〇歳になるアスキスは「見る影もなく変りはてており」、⁽⁵⁷⁾こうした状況のなかでみずからロイド・ジョージを打倒する政策や方向性を示す覇気をもたなかつた。また内心、恋恋として「連立内閣」の延命を願つていたロイド・ジョージにはアスキス派を併合・吸収する展望も迫力もまた魅力もなかつた。アスキスはロイド・ジョージを倒せない。ロイド・ジョージもアスキスを打倒することができない。両者は対立を深めながら泥沼に落ち入つていたのである。一九一八年から四年間つづいたロイド・ジョージ「連立内閣」が、アスキスなどの外部勢力によつてではなく、その内部勢力によつて、つまり「連立内閣」の一翼を担う保守党の「バック・ベンチャーズ反乱」によつて自壊させられたことは、⁽⁵⁸⁾二人の指導者がいかに状況に圧倒され、いかにその指導力を失つていたかを雄弁に物語ると言へよう。これが一九二二年一〇月にいたる基本的問題点なのである。

もとより現職の首相たるロイド・ジョージは、一九二二年一〇月に失墜するまで可能なかぎりさまざまな顔を演じわけその政治的延命をはかつた。ときには連立主義者^{コアレンティスト}として、ときには急進主義者として、またときには国家のためにはその急進主義をも犠牲にする人間として、なおかれは努力した。⁽⁵⁹⁾けれども二〇年・二一年の不景気と失業の増大、

それに戦後も依然として流血のたえることのなかったアイルランド問題の最終的収束など、重要な争点の数々は歩一歩確実にかれを没落に向けて押しやった。そして一九二二年七月の爵位売買スキャンダルとそれにつづく「チャナク危機」が、周知のようにかれを墜落させる最後の争点となったのである。戦後一貫してかれを支えてきた保守党の議員団は同年一〇月一九日カールトン・クラブに集まり、ついに「連立内閣」との訣別宣言をした。⁽⁶⁰⁾かくしてロイド・ジョージは終り、アスキスとの抗争にもここにまったく新しい局面をもたらすことになるのである。

「カールトン・クラブ集会」は、言うまでもなく一九二〇年代イギリス政治史の最大の転換点である。これによってイギリスは、第一次大戦以降の「連立内閣」による例外的政治に一応の終止符を打ち、ふたたび二大政党政治に向けて軌道修正しただけでなく、「戦争に勝利した」英雄ロイド・ジョージをも劇的に失墜させたからである。ロイド・ジョージはこれ以後、二度と政局の主導権をにぎることはない。ただ右に述べたような当時渦中にあった人々が、こうした時代の転換をはたしてどこまで深く認識していたかはきわめて疑問であろう。アスキスと夫人マゴットは、当然のことながらロイド・ジョージの没落を誰れよりも喜んだ。⁽⁶¹⁾しかし当時、飽きもせず毎夜パーティーにあらわれては泥酔し醜態をみせていたと言われるアスキスが、⁽⁶²⁾「カールトン・クラブ集会」をどのように政治的に意味づけ、どのように自己の跳躍のバネにしようとしていたかは必ずしも明確ではなかったのである。それに同様のことは、ロイド・ジョージ自身にもあてはまるかも知れない。ロイド・ジョージは首相辞任直後、一〇月二一日のリーズ(Lees)集会での挨拶のためロンドンのセント・パンクラス駅を出発した。しかしその時かれは失意の人であるようには見えなく、まるで凱旋將軍のようであったと言われている。集まった人々を前に述べて「いまや重荷はわたしの肩からとりのぞかれた。しかしわたしはいまだに剣をにぎっている」と大見えを切ったかれは、⁽⁶³⁾おそらく内心この時が自分の終

りのときであるとは夢にも思わなかったにちがいがなかったのである。かれはリーズからロンドンに帰り、非公式に閣議室に秘書団を集め別れの言葉を述べる。しかしみな悲痛な面影をうかべている前で、その時もロイド・ジョージだけはきわめて陽気であり、さかんに冗談や皮肉をとばしていた。⁽⁶⁴⁾ アスキスもロイド・ジョージも、自由党再建についてはまったく思いもやらぬようであった。

三 疑心そして和解

イギリスの政局は「連立内閣」崩壊後もなお激しく流動した。一九二二年一月一九日にロイド・ジョージが去つてその四日後の二三日、内閣はボナ・ローが組織することになった。戦後初の保守党単独内閣である。しかし自由党が分裂していたのと同様に、カールトン・クラブ集会以後の保守党においても実は新指導部と旧指導部との対立が深刻化するという不穏な動きがあつて、⁽⁶⁵⁾ 状況は依然として波瀾ぶくみであつた。さらに擡頭する労働党の存在をこれに加えて勘案すると、一体政局はこれからどう動くのか、まったく誰れにも予測できなかったと言つてもよい状態であつた。ともあれボナ・ローは、政権掌握三日後の同月二六日直ちに下院を解散し、国民にむかつて新内閣への支持をもとめた。一九二二年一月一〇月おそくから十一月一五日（投票日）にかけて、イギリスはふたたび選挙戦につつまれたのである。

しかしこの一九二二年総選挙に対するアスキスとロイド・ジョージの取り組みは、多くの人々がしばしば指摘しているように、御世辞にも堂々たるものとは言えなかつた。一つの時代が画されつつある混乱期の選挙戦において、二人の指導者はその進むべき方向もそれにともなう積極的な政策的方針もだしえず、ただ状況に追随するだけであるか

にみえたのである。ことに注目されるのは、それぞれ党派を異にしても、二人の指導者がひとしく保守党と労働党に対する基本的な批判点を明らかにしえなかったと言う事であろう。ロイド・ジョージの失墜したいま、主たる攻撃対象を失ったアスキスは、これに連動してか保守党批判においても著しく生彩を欠いていたし、また労働党に対してもかれらに対抗して社会改革の新基軸をだしうるほど意欲的ではなかった。⁽⁶⁶⁾ 他方、保守党一般議員の「反乱」によって政権の座を追われたロイド・ジョージは、しかしそれでもなお依然として保守党との提携の可能性があるやに錯覚し、徹底した「野党」意識をもつにはいたらなかったのである。⁽⁶⁷⁾ 言うまでもなく、政権はいまや保守党に移っている。けれども、選挙戦を通じてアスキスもロイド・ジョージも結局はこのことの意味を最後まで十分に認識しえなかったようである。なにしろH・A・L・フィッシャーが皮肉を込めて言ったように、労働党を除く「これら（保守党・自由党アスキス派・自由党ロイド・ジョージ派の）三つの政党は、実際には有権者に対してまったく同じような綱領を掲げてのぞんだのだから！」⁽⁶⁸⁾

選挙の結果は、当然のことながらボナ・ローの率いる保守党の圧勝に終わった。保守党は三四四議席を獲得し、野党各派を圧倒した。それに労働党も非常な躍進をみせ一四二議席を獲得した。しかし自由党は惨敗であった。アスキス派は六二議席、ロイド・ジョージ派は五三議席をえるにとどまり、両派あわせても労働党の勢力にはるかにおよびなかつたのである。⁽⁶⁹⁾ ロイド・ジョージ派は指導者層から多くの落選者をだした。W・チャーチル、C・アディソン、H・グリーンウッド(H. Greenwood)、F・ゲスト、M・モンタギュー、F・ケラウィー(F. Kellaway)など軒並み落選の憂き目を見た。⁽⁷⁰⁾ これを知ってアスキスは内心快哉を叫び「非常に満足した」⁽⁷¹⁾。しかしアスキス派もまたD・マクリーン、G・ハワードなど重鎮を失い大きな痛手をこうむつたのである。⁽⁷²⁾ 自由党両派のうち選挙結果は比較的ロイド

・ジョージ派に敵しいようにみえよう。歴史家もこの点に言及するとき、みな一様にそう評価する。しかし受けた打撃は、現実問題としてアスキス派とて同じことであり両派とも五十歩百歩であったのである。

ところで、一九二二年の総選挙を契機とする一連の政治的結果は、自由党の抗争にも新たな動きをもたらすことになる。労働党の躍進と自由党両派の後退と言う際立った明暗が、自由党党员の間にもはや党内の分裂状態を克服すべきであると言う声をあげさせるにいたったからである。現に総選挙直後の二二年一月二七日には、両派の党员約一〇〇名あまりが下院の一室に集り、積極的に両派の「統合」を推進すべきであるむね意見を交換した。また同年クリスマスまでに、そのうち約七〇名あまりの議員が「統合」賛成に署名した。⁽⁷⁴⁾ それら署名議員たちは翌一九二三年三月一二日ふたたび下院に集り、統合への意志統一を再確認し同時にさきの署名を公表するにいたったのである。⁽⁷⁵⁾ こうした動きのなかで、ロイド・ジョージはかれの率いるロイド・ジョージ派がもはや独立した政党の体裁をなしていないこともあって、統合の気運に乗じるにやぶさかではなかった。「アスキス老は……何か心にひっかかるものがあるだろう⁽⁷⁶⁾」と言いながらも、かれはこの問題に一応積極的な姿勢をとりはじめ、二三年三月二日にいたるやスコットランド自由党クラブ (the Scottish Liberal Club) 集会で演説して、いまや自由主義の復興に不可欠なのは「第一に統合であり、第二に一つの党綱領である」、「自分は喜んで誰れの指導のもとにも従う」と言つてのけたのである。⁽⁷⁷⁾ 見方によつては、いささか政治的節操が疑われる発言ではある。けれども、二〇年代初頭の自由党分裂に関して、これはやはり新たな局面をつくる演説であった。

だが、アスキスもアスキス派の幹部たちも右のような動きに対しては始めからまったく冷淡であった。二二年一月に両派の議員が下院に集り統合について話し合ったときも、アスキスはこれを論評して「昨夜、下院の委員会の一

室に集ったわが派と元の連立派自由党員の連中の間には一種の『兄弟愛』のようなものが生じたらしい……。しかし自分は（統合について）無理をすることもまったくいやだし、それにわれわれの立場を放棄する気にはまったくなれない⁽⁷⁸⁾と冷たく書き残したのである。実際二三年総選挙以後のアスキスおよび同派の幹部は、ことごとく「統合」阻止のために行動したと言って過言でなかった。たとえばアスキスは、一九二三年二月G・R・ソーンとJ・M・ホッジに代って「統合」反対派の最右翼たるV・ヒリップスを幹事長に就任させ、自分の意志がどこにあるかを内外に明示した。またこれとは別に両派の一般議員の統合への動きについては、大のロイド・ジョージ嫌いであるC・F・J・マスターマン(C・F・J・Masterman)が見解を示し、もし統合が実現するようなことになるなら自由党内には政治的隠退者や他党への脱党者が続出することになるだろうと凄みをきかせた⁽⁷⁹⁾。さらに、さきのスコットランド自由党クラブにおけるロイド・ジョージ演説に対しては、同演説がなされた翌日つまり三月三日にすかさずJ・サイモンが反論しこれに冷水をあびせし、それから四日後、同様にアスキスもまたケンブリッジ大学で発言しロイド・ジョージ演説に対する牽制球を投げたのである⁽⁸⁰⁾。こうして、二三年三月二二日にはアスキス派の議会自由党大会が正式にアスキスの方針を了承したこともあって、⁽⁸¹⁾「統合」は現実には不可能となった。しかし以上のような統合への動きがこの時期の自由党全体にはじめたと言うことは、やはり注目されるべき新たな要素であった。

しかしそれにしても、アスキスはどのようにして「統合」に踏み切れずかたくなに反対の態度をとりつづけたのか。ひとつ考えられる理由は、統合はたしかに望ましいことだが、しかしそれも議会内における討論での協力と採決での協力を積み重ねることがさきで、いきなり「統合」を考えるのは無謀である、とかれが公的に主張していたことである⁽⁸²⁾。しかしもとよりこれは、決してかれの真意ではなかった。アスキスが「統合」に反対した本当の理由は——その背後

にいつものようにマゴットの猛反対があったと言う点も無視できないけれども——やはりロイド・ジョージへのぬぐいがたい疑心によると考える方がより真実に近いのである。たとえば選挙直後、必ずしも自由党・保守党・労働党の枠にとらわれない進歩勢力の大々的な政治的結集をよびかけたロイド・ジョージの発言をとらえて、こうした発言にみられるようにロイド・ジョージの発想の背後にはつねに「中央党の亡霊」がある、ロイド・ジョージにとって自由党の「統合」はあくまで中央党建設のための踏み石にすぎないのだ、とヒステリックな批判を展開したアスキスの態度にわれわれはかれの本心の一端を垣間見ることができよう。ロイド・ジョージは結局は保守党にはしるにちがいない。だからこそ、ロイド・ジョージはきっぱりと連立主義者コアレンシニストと手を切ると明言しないのだ。これがアスキスにおける統合拒絶の真の理由であったのである。⁽⁸⁵⁾かれは、この段階にいたってもロイド・ジョージへの疑心にもみもつづいて行動していたのである。しかしさらに強調しなければならない点は、このような姿勢をとるアスキスのなかには、自分こそが正統派自由主義の嫡子であって、ロイド・ジョージなどあくまでも裏切り者である、したがってこちらから求めて妥協するなど論外である、と言った意識がひめられていたことであろう。⁽⁸⁶⁾当時のアスキスは過去の業績にもとづく矜持と自由党指導者としての古典的スタイルの踏襲によってかろうじて支えられていた。それがかれの政治的情熱のすべてであった。それゆえ、発想の転換や妥協点を摸索することなどかれには期待できなかったのである。だからこの点に関しては、「統合」を主張するロイド・ジョージがアスキス派から「連立内閣」構築の責任を問われて自己批判をせまられそれを断り、およそつぎのように反駁して居直ったその言い分にも一理はあったのである。すなわち、アスキスはあたかも汚れなき自由主義の独占者であるかのようなのである。しかしそれなら、ポーア戦争に際して僕が党首キャンベル・バナマンにつかえ戦争反対者として良心的でかつ忠実な自由黨員としてあったとき、かれアスキ

スはどうであったと言うのだ、⁽⁸⁷⁾と。いずれにせよ、自由党の没落に無自覚で党再建への糸口をみいだそうとしないアスキスが、転換期における指導者たるものの重大な責任を何らかの形で放棄していたことは明白であった。

他方それでは、ロイド・ジョージはこの時点において一体何を考え、どのような政治的立場を築こうとしていたのであろうか。さきにも示したように、二二年の選挙後政治的に孤立しつつあったかれが「海図にしるされていない海原に停泊する」⁽⁸⁸⁾ような不安にさいなまれ、一応、統合推進に踏み切ったのは事実であった。そのことを、かれは公けの場で幾度もくりかえし発言し明確にしている。しかしこのときのロイド・ジョージの心境は実際にはそれほど単純ではなかった。ひとつたしかかな事と言えば、それはロイド・ジョージが基本的には次のように考えていたことである。すなわち労働党の擡頭と言う大変な事態を前にして、いまだにグラッドストーン流の「伝統主義」的対応しかみせることのできないアスキスとその郎党は戦後政治には適合しないと言うこと、⁽⁸⁹⁾これである。つまりロイド・ジョージもまた、内心アスキスに対する非常な懐疑心と、軽蔑心をもって状況に臨んでいたのである。したがって、公的に「統合」を進めるべきであることを主張するロイド・ジョージの発言も、実は自由党の再建と言う見地からみるかぎり必ずしもそれほど歯切れのよいものではなかった。かれの「統合」推進論は、アスキスとの和解をすすめようとするものであるよりは、むしろ「革命」的色彩にいろどられた労働党の擡頭を、とりあえずいかに阻止するか、そのために進歩的勢力をいかに結集し、自由党や保守党の良心的部分に対する「共同の敵」にどう対決するか、と言う発想からなりたっていたのである。⁽⁹⁰⁾だからこそかれは、自己の立場を印象づけるために当時さかんに進歩主義と言う言葉ををつかった。自由党の代表的イデオログたるC・P・スコット(C. P. Scott)が、自由党の再建は昔のウィッグ主義者や自由帝国主義者たち^{インベリアリスト・リベラル}によってではなくあくまでも労働党に対抗しうる急進主義者にこそあるとして、それをロイ

ド・ジョージに託し、かれの過去のあやまちには目をつぶったゆえんであった。⁽⁹¹⁾

しかしよく考えてみると、こうしたいわば「進歩党」の盟主として自己の政治的将来を考えるロイド・ジョージにもやはり問題があるのであって、かれの場合には自己をカリスマ的な国民的英雄に擬する、そうした不安定な姿勢がどこかに秘められていたように思われるのである。言い換えれば、かれはたしかに政治的リアリズムの追求者ではあった。けれどもなお「連立内閣」の首相として絶大な指導権を發揮した昔日の夢からぬけきっていなかったのである。アスキスは、転換期であることを自覚せず旧態依然たる政治行動に準則して、いまや指導力を喪失しているだけでなくむしろ指導者として一種墮落した状態に陥っている。しかしロイド・ジョージの場合も、いまだにその酔顔を払拭しえず、「カールトン・クラブ集会」において一度決定的に否定された政治スタイル——「沸きたつような興奮の坩堝に政治を投入すること」⁽⁹²⁾——をどこかで追いかけていたように思われるのである。かれがこうした態度をとる人物であるとすれば、もとより自由党の指導者としては失格であったと言えよう。ここからは地道な党再建の展望もでないし、二〇世紀における自由主義のありかたを真剣に摸索する姿勢もうかがえないからである。これもまた墮落の一つの形であったにちがいないのである。アスキス派の人々がロイド・ジョージに本能的な不信感を抱いていたのも、実は右のような危惧に関連していたのかも知れなかった。

いずれにせよ、一九二三年に現われた自由党統合の気運は同年夏までには一応ことごとく挫折を強いられた。精力的に両派の調停に走りまわったC・P・スコットなどの努力もすべて水泡に帰した。ただこの間、明るい材料もなかった。それは同年五月三〇日から六月一日にかけて開かれたN・L・Fバックストン大会(the general meeting of the N. L. F. at Buxton)の席上、黨員間にやはり統合への強い希望があることがわかったからである。もと

より大会自体は、大会議長D・マクリーンの意向もあって、自由党の統合を直ちに実践にうつすことなど断乎拒絶した。少なくとも「自由党統合に関するバックストンの具体的な成果は、実質的にはゼロであった。⁽⁹³⁾」しかし統合を阻止し自由党の再建をはばんでいるのはようするにアスキスなど一部の指導者たちであって、必ずしも個々の地方レベル、議員レベルなどではないと言うこと、このことが次第に明らかになったのもバックストン大会であったのである。⁽⁹⁴⁾それに大体アスキスが恐れていたことは、右のような下部黨員の願いとは関係なく、ロイド・ジョージと妥協すればかれに指導権を奪われてしまうのではないかと言うことにつきていた。この意味においては、たしかにアスキスは、「一九二六年一〇月までロイド・ジョージを排除しつづけることに成功した。しかしそのかわり党は崩壊⁽⁹⁵⁾」することになるのである。ともあれN・L・F・バックストン大会で自由党再建への一筋の光明がみえたのは確かであった。しかしそれとは別にこの当時のアスキスの堅い態度をみて、一方のロイド・ジョージは悩みかつ同年七月頃までにはしばしば自暴自棄に落ち入る。労働党と対決するためにはやはり保守党との提携しかないのか。かれはこう考えおおいに動揺をくりかえすのである。⁽⁹⁶⁾

ところが、自由党の「統合」は以上のような党内における統合実現の努力やそれをめぐる紆余曲折とは無関係にきわめて唐突に、しかも意外な理由によって成立するのである。歴史はときには氣まぐれである。それは首相S・ボールドウィンが同年暮、閣僚や保守党幹部など多くの人々の猛反対を押し切ってふたたび総選挙を挙行し、政局の動きを急変させたことに起因した。周知のように、ボールドウィンはすでに五月二二日、喉頭癌のため辞任していたボナ・ローに代って首相の座にあった。しかし一九二二年の総選挙においてボナ・ローの副官として選挙戦を勝利に導びき自信をつけていたボールドウィンは、いまや自己の手中にある首相職を国民の審判によってオーソライズするため、

イギリス自由党はなぜ没落したか

あえて危険を冒してまで総選挙に訴えたのである。⁽⁹⁷⁾しかしその際問題であったのは、かれが保守党の政策的支柱を自由党各派が絶対に受け入れることのできない保護貿易の実施にもとめたことであった。もとよりこのとき、ポールドウインは決して簡単にこのような政策を採用したわけではなかった。むしろかれは悩みに悩んだと言えよう。⁽⁹⁸⁾しかしポールドウインが保護貿易主義に踏み切らなければ、当時ロイド・ジョージこそが保護貿易の立場をとるのではないかとさかんに噂されており、もしそうなれば政治的イニシアチブをロイド・ジョージに奪われてしまうような事態も考えられるので、ポールドウインは最後に保護貿易政策採用の決断を下したのである。⁽⁹⁹⁾しかしこうした事情はともかくとして、ポールドウインがロイド・ジョージの機先を制した以上、ロイド・ジョージとしては逆に自由貿易主義の旗幟を鮮明にしなければならぬ道理であった。それに立党以来、自由党の伝統的な政策上の基盤は言うまでもなく自由貿易主義にある。アスキス派も当然保守党に対決すべく決起せざるをえなかった。かくて、ここに自由党各派は何らかの形で妥協し、かつ統一行動をとりうる千載一遇のチャンスを与えられたのである。ポールドウインは、実に皮肉にも難航しつつあった自由党の統一を外部の人間たるみずからの手で促進してやるため総選挙を挙行したようなものであった。

これより早く、同年九月二九日からアメリカおよびカナダへ旅行し、いたるところで大歓迎を受けていたロイド・ジョージは、ポールドウインが閣僚に対してちょうど総選挙の決意を披瀝した十一月九日に帰国した。サザンプトンにまち受けたA・モンドとC・マカーディに手短かにこの間の事情を聞くやかれは直ちに決断し保守党に対決するかの⁽¹⁰⁰⁾ように自由貿易路線をとることを国民に明示した。これで二二年以降のロイド・ジョージの立場もはっきりし、かれは一応アスキス派の人々の疑惑を解消し和解への糸口をみいだすことができたのである。事実ロイド・ジョージは、

帰国四日後の一二月三日にA・モンドのお膳立てにしたがいアスキスと会見し、急遽合意をえて、ともに自由貿易主義のもとに「統合」し選挙戦をたたかうことを宣言するにいたる。⁽¹⁰¹⁾ロイド・ジョージ派の組織は大急ぎで解体された。『ロイド・ジョージ・リベラル・マガジン』も二三年一月以降発行を停止されることになった。F・ゲストやW・チャーチルのような札付きの連立主義者までが自由貿易論者であると言う理由だけで戦列に復帰することができた。ロイド・ジョージは、いわゆる「ロイド・ジョージ基金」から選挙資金として九万ポンドを党に醸出した。もともとロイド・ジョージ自身の言葉によれば、かれは実際には一六万ポンドをだしたと言うことになっているのだが。⁽¹⁰²⁾——しかしいずれにせよこうして、一月二四日にいたるやスコットランドのペイズレー選挙区で選挙戦を闘うアスキスのもとにロイド・ジョージが娘メーガン(Megan)とともに応援のためかけつけ、二人の領袖が一緒に演壇にたつと言う劇的な光景がみられることになったのである。群集の熱狂的な拍手喝采と眩いフラッシュの閃光がはしる演壇のうえで、アスキスとロイド・ジョージはともに「統合」を誇示するかのように獅子吼した。⁽¹⁰³⁾あたかも二人の過去には何事もなく、これで一見真実の統合がなったかのようであった。

この一九二三年の総選挙の結果は、自由党の一定の党勢回復と保守党の敗北となってあらわれた。自由党の前回獲得議席数はアスキス派、ロイド・ジョージ派あわせて一一五であったが、今回一九二三年一月二日(投票日一月六日)においてはこれに四三を加え全部で一五八議席をえることができたのである。保守党は二五八議席をえ依然として第一党ではあった。しかしこれは前回の三四四議席より八六議席を減じたものであり、今回労働党が獲得した一九一議席と自由党の一五八議席の合計した数にははるかにおよびなかった。これに比較して一九二二年総選挙の結果と今回の結果をくらべてみると、労働党の躍進は著しく、第二党としてほぼ揺ぎない地位をきざきつつあることは一目瞭然

であった。結局、ポールドウィンは自己の政治力を強化する乾坤一擲の賭に敗れたのである。⁽¹⁰⁴⁾

しかしとりあえず、ここで問題なのはこの一九二三年一二月の総選挙において自由党「統合」の効果がどうあらわれたかと言うことであるが、しかしもとよりその効果については明らかに顕著であったと言えよう。両派に分裂して戦う状態から一応脱したことによって、同党はイングランド、スコットランド、ウェールズの多くの地域で保守党につぐ第二党に躍進することができ、党の将来についても黨員の夢をかきたてることができたからである。⁽¹⁰⁵⁾ただ選挙結果を詳しくみればさまざまな問題が残るのは当然のことである。たとえば各地の結果にあらわれたアスキス派議員の「勝利」とロイド・ジョージ派議員の「敗北」が、自由党全体の勝利をバランスの失した不安定なものにしていること。また今回党勢回復がみられたと言っても、全体として当選者は主として農村部などに集中し産業地帯や都市部など重要な地区では、いたるところで労働黨員に打倒されていたことなどである。⁽¹⁰⁶⁾しかしそれにもかかわらず、選挙結果からして自由黨員がとりあえず、非常な自信をもつことができたのもまた事実であった。かれらはたとえ根拠のない確信にしろ、一様に、自由党はいまや強大になりつつあると思いはじめることができたのである。まことに「自由党はイギリス政治の裁定者である。それに（保守党の）保護貿易と（労働党の）資本課税の『中間』をゆくものとしての『自由貿易』イデオロギーは、保守党の右派と労働党の左派をとりのぞいた中間地帯にまたがる、要地を扼した中道政党の基礎となることができる、こうした幻想⁽¹⁰⁷⁾」を人々はもちはじめたのである。これが少なくとも「統合」の直接的な結果であった。

さて、こうしてアスキスとロイド・ジョージはポールドウィンによる総選挙の断行と言う思いもよらぬ事態の勃発によって一応和解することができた。久しい疎隔のちともに戦った一九二三年の総選挙においても、かれらは一定

の勝利をおさめることができた。これで自由党の懸案事項はすべて解消されたかのごとくであったのである。しかしつきつめてよくみると、やはりこれは「偽善の和解」であり、かつ「不安定の勝利」にすぎないと言うことが容易に想像されるのではあるまいか。アスキスとロイド・ジョージがともに抱いた積年の疑心と憎悪が、一九二三年一月にたちまち氷解し一朝にして党再建の展望がひらける条件など、これまでみてきたことからして基本的にはどこにも存在しなかったからである。

それにアスキスが統合に踏み切った理由には、非常に生臭い利害がからんでいたことも記憶にとどめておかなければならないであろう。それはたとえば、かれの組織がロイド・ジョージの組織に比較して決定的に資金不足であり、したがって毎年のごとく総選挙を戦うのはとても無理であることから、ロイド・ジョージの潤沢な資金が垂涎的であったことなどである。⁽¹⁰⁸⁾ そのうえ、もともとアスキス自身としては統合をすすめたとしても別にその「古典的自由主義」を修正する必要など少しもなかった。また何らかの形で決定的な譲歩をせまられることなどもなかった。つまりアスキスにとって、「統合」は政局の流動している緊急時において便宜上マイナスではないと言うだけの、ただそれだけのものにすぎなかったのである。しかしこのことは、ロイド・ジョージ側からしてもまた同様であった。すでにしばしば引用しているT・ウィルソンによれば、このときのロイド・ジョージの統合への決断は決して「決断」とよべるような代物ではなく、かれがそうしたのも自由貿易主義を表明することぐらいしか他にすることがなかったからである、⁽¹⁰⁹⁾ と酷評される。もっとも、T・ウィルソンはつねにアスキスよりロイド・ジョージに厳しい見方をする歴史家であるので、われわれもかれと同じように言い切つてよいものかどうかいささか疑問が残る。しかしこの点に関しては、少なくとも次のように言うことができるのではないか。それはかねてより社会主義に対抗するために先手を

打って急進主義的政治ブロックを構築すべしと主張していたロイド・ジョージにとって、その構想をとりあえずここで統一自由党に託してみることは決してマイナスではなかったにちがいない、と言うことである。すなわちロイド・ジョージにとっても、統合はまた現時点における便法であったのである。こうして統合は現実にはどこまでも政治的野合たる性格をまぬがれえなかったと言えよう。ことはそれほど簡単には解決されていなかったのである。それゆえ、自由貿易主義のもとに一致した政策を掲げて戦ったはずの選挙戦において、保守党員に嘲笑されて自由党は他党に反対するためだけの「消極的一致」に満足し、コブデンやブライトの時代に逆もどりしたのかと毒づかれても、自由党両派の人々はこれを真正面から切りかえすことができなかった。また同じく、労働党員に罵詈雑言を浴びせられて自由党の原則とは一体何か、それは単なる便法か、と言われてもかれらはただ沈黙をまもるしか手がなかったのである。⁽¹¹⁰⁾ それと言うのも、二人の領袖はようするに「まぐれ当りを期待した結婚」⁽¹¹¹⁾を挙行したにすぎなかったのだから。

かくて、自由党において基本的な問題はいまだに何ひとつ解決されていないと言うことがおぼろげながら理解されよう。アスキス派のD・マクリーンやグラッドストーンなどはこの時にいたってもロイド・ジョージによる党の支配に恐怖をいだき、こう話し合っていたのである。アスキスはロイド・ジョージと渡りあえるほどしたたかではない。かれが個人的にロイド・ジョージと会って話しをするとすればその手練手管によってたちまちにしてやられてしまうにちがいない。したがって、とにかくアスキスとロイド・ジョージが一对一で会うことのないように、われわれはたえず気をくばっていよう、と。こうしたアスキス周辺の幹部たちの態度に対して、むろんロイド・ジョージ派の指導層も黙っていないなかった。統合がなった四ヶ月後一九二四年三月のことであるが、たとえばその一人E・グリッグなどはこう書いている。「現在アスキスとロイド・ジョージとの間に本当の理解があるなどとはとうてい思えない。近ご

ろアスキスは病氣のためめったに下院には顔をださない。ロイジ・ジョージもまたずーっと欠席しており、社交的なまじわりをまったく避けているように思われる。……いずれにせよロイド・ジョージは自分自身とその基金を Wee Free の組織のためなげうつようなことはすべきでない。なにしろ、あの（アスキス派の）連中ときたらとにかくできるだけ早くロイド・ジョージを絞め殺すこと、それ以外の事は考えていないのだから」と。アスキスはロンドンのアビングドン街二一番地に事務所を構えていた。ロイド・ジョージは皮肉にもそこから数軒離れた同じくアビングドン街一八番地に事務所を設置していた。両派はそれぞれ別個のスタッフを擁し、いまだに独自の活動をつづけるかまえを保っていたのである。⁽¹¹⁴⁾ 両派の反目はなお継続していた。アスキスとロイド・ジョージの宿恨は深く、自由党の再建はまだ遠いかなたにあったと言って、決して過言でないであろう。

四 不安そして敗北

一九一八年暮れから一九二三年の暮れにいたる五年の間、イギリス自由党のたどった足跡を振り返ってみると、その特徴は右にみてきたように領袖たちの対決と抗争によるかれら自身の指導力の喪失とそれに伴う党の荒廃とにもとめられた。たしかに二三年の総選挙の結果にみられるように、自由党が一時党勢を回復し、漸進的な凋落化の傾向に歯止めをかけたかにもえたのは事実であった。けれども、党内には指導者間の不信と対立と言う「分裂」ぶくみの致命的な欠陥が残されており、党勢拡大は必ずしも党再建への道につながらず、人々の再建への夢はやはり一瞬の幻影にすぎないことが明らかとなったのである。自由党がこうした事態に陥ち入った責任の大半は、——もとより黨員すべてが担わなければならぬのは自明であるけれども——繰り返えすまでもなく、あくまで党首アスキスとロイド

・ジョージ自身にあった。しかしそれにしても、この五年間の荒廃と言う大きな負債は、いつしか必ずや表面化し、一挙に党を破滅の淵に押しやらずにはおかない性質を秘めていた。結論から先に述べれば「一九二四年」と言う年は、そうした意味で自由党にとって決定的な年となるのである。アスキスとロイド・ジョージは、この段階にいたり状況をどのように認識しどう行動しようとするのか。一九一六年以来次第に顕著になった党の没落^{ディクライン}は、そのかれらの動きに関連してどのようにして急速な没落^{ダウンフォール}にいたるのか。⁽¹¹⁵⁾ いましばらく両者の動きを追跡してみることにしよう。

ところで一九二四年の冒頭、自由党の直面した政治状況は実に複雑きわまりなく、見方によってそれは前年度や前年度の状況に比してはるかに深刻な内容をはらんでいた。問題はこうであった。二三年一二月の総選挙の結果、保守党は依然として下院で相対的多数を占め第一党であった。しかし保守党の議席数は、労働党・自由党のその合計より絶対的に少数であった。したがって、保守党がこのまま単独で政権を維持することは誰れがみても困難であった。⁽¹¹⁶⁾ しかしそれでは、保守党に代り自由党や労働党が単独で政権を担当できるかと言うと、これまたきわめて難かしい状況にあった。つまり政局は、少なくとも現時点ではいわば三竦みの様相を呈していたのである。だが、それは各政党間の「協力」や「提携」などの動きかたいかんによって直ちに何らかの方向に向って流動化し、将来の政治体制の性格をも決してしまうと言う内容をはらんでいた。どの政党とどの政党がどのように協力し多数派を形成するのか、各政党の指導者たちにとってはきわめて慎重を要す重大場面であったと言えよう。

そこで、ボールドウィンがあくまでも単独少数党政権を維持しうる場合を除いて、ここでとりあえず考えられる選択肢は二つ存在した。(一)その第一は、ふたたび「連立内閣」を構築し事態の收拾をはかろうとする構想であった。これは総選挙直後からとくに保守党内各派に擡頭したアイデアであったが、これを唱えた政治家たちの主張にはそれぞれ

れ微妙なニュアンスの相違があり、それら個々の「連立内閣」構想をひとつにまとめることは必ずしも容易でない。しかしこれらの主張は、おおよそ次のようなものとして概括できた。すなわち首相ボールドウィンは選挙で敗北した。だからかれには責任をとらせ辞任させる。そのかわり、首相にはバルフォア (Lord Balfour) か A・チェンバレン (A. Chamberlain) をすえ保守党主導のもとに自由党と「連立内閣」を組む、これである。⁽¹¹⁷⁾ なおこのアイデアを鼓吹した人々のなかには、もしバルフォアや A・チェンバレンが無理であるなら首相にはアスキスもしくは E・グレイでもよろしいと主張する者もあり、⁽¹¹⁸⁾ 自由党サイドからすればこれは現実的な構想であると言うだけでなく、はなはだ魅力的な、捨てがたい選択肢であった。⁽¹¹⁹⁾ しかし自由党の反応がどうであったかは別として、この「連立内閣」構想案は、ボールドウィン派の結束と奮起もあって保守党内においては難航のすえ一応押えられた。当時ボールドウィン派の指導者の一人であった L・S・エイマリー (L. S. Amery) がいみじくも言ったように、イギリスにとつていま重要なのは建設的保守党と労働党なのであって「死にかかっている自由党」ではないのである。⁽¹²⁰⁾ 同じようにボールドウィン自身にとつても、いま考えられるべきものは、「連立内閣」による事態収拾策ではなくあくまでも「二大政党制」を堅持することにほかならなかった。つまりボールドウィンのアイデアは、もし下院で保守党政府が不信任されるなら保守党は「憲政の常道」にしたがい政権を第二党たる労働党にわたし直ちに野に下るべきである、と聞きわめて衝撃的な内容をふくんでいたのである。⁽¹²¹⁾ これが第二の構想であった。しかしその際、もとより労働党はあくまでも少数政党である。したがって自由党サイドからみれば、このボールドウィンの決意を逆手にとつて、かれらがとりあえず「労働党政権」を承認し新たに自由党・労働党の両党で多数派を形成し権力を運用することも可能であった。これもまた捨てがたい、しかし熟慮を要す選択肢であった。以上の二つのアイデアの実現に関しては、實際上保守党内部の

イギリス自由党はなぜ没落したか

主導権争いのゆくえが決定的な比重を占めており、ボールドウィンの党内における不退転の決意とボールドウィン派の巻き返しと言う条件もあり、選挙後時間がたつにつれて前者より後者の方がより現実性を帯びていった。しかし状況はなお流動的な要素をふくんでいた。アスキスやロイド・ジョージの動きもまた政局に大きな波紋をなげかけかねなかつたのである。

統一自由党がこの難局に示した態度は、結局は「労働党政権」の承認と云うことであつた。総選挙直後から、アスキスは自由党が保守党政権の延命に手をかすようなことはないであろうと表明して(122)いたが、実際そのとおりにかれは労働党を政権の座につけることを決意し、ロイド・ジョージもまたこれに従つて自由党の対応の仕方を定めたのである。かれらは、ともあれ二四年一月に開かれた下院議会においてその旗幟を鮮明にした。一月一日、首相ボールドウィンが下院に政府の施政方針を示す「国王演説」を提示し白熱した論争をよびおこしたさい、自由党は労働党のJ・R・クラインズ (J. R. Clynes) の提案した「国王演説」修正動議(一七日提出)に賛成の立場を明らかにし、帰趨を決したからである。この修正動議をめぐる票決は一月二一日行なわれた。政府案は三二八票対二五六票で否決され、ついで修正案が三二八票対二五一票で可決された(123)。自由党の動きによつてついに政府は不信任されるにいたつたのである。ボールドウィンは翌二二日、下院においてみずから国王に辞表を提出したことを明らかにした。かくて保守党政権は崩壊し、ここにイギリス政治史上初の社会主義政権が樹立されるはこびとなつたのである。その日の夕刊のヘッド・ラインは「レーニン死去(公式発表)。マクドナルド首相に就任(124)」であつた。激動の時代を象徴するのにまことにふさわしい表現であつたと言えよう。

ただこのようにして、アスキスとロイド・ジョージが自由党の意志を内外に示し政局のゆくえを決するような動き

をしたとは言っても、ここで強調されなければならないことは、やはり表面に現われたその行動とは裏腹に、かれらがこのとき実は内心戦戦恐恐たる心理状態にあり、下院の行動にさいしてもおおいに逡巡し躊躇していたということであろう。

たしかに先にもふれたように、アスキスが自由党は保守党政権の延命を助けることはないと言明し早くからその立場を明らかにしていたのは事実であった。またしばしば指摘されるように、このときアスキスがつぎのように状況のゆくえを「計算」し行動の指針としていたのも事実である。すなわち、とりあえずこの状況の下では労働党を政権の座につける。しかしそうであっても労働者は弱体でありかつ政権担当能力をもたないのだから、当然かれらは政権を投げ出すことになる。そうならざるをえないであろう。自由党が表面にでるのはその段階においてであり、最後に政権を奪取するのはわれわれである。あるいは、たとえ政権をとれなくともわれわれは少なくとも「労働党政権」をコントロールできる、と。しかし残念ながら、たとえそのような計算をしたとしても、このときのアスキスとロイド・ジョージには、かれらがイギリス政治の将来に関する長期的展望をもち、転換期であることを意識して何らかの原則を掲げて行動した、と言うようなより積極的に評価されるべき気配はどこにもみあたらなかったのである。このことは決して等閑にふされるべきではない。つまりかれの行動は、表面的なその整合性にもかかわらず現実にはあくまでも場当りの計算にもとづいていたのであって、いささか誇張して言えば、その内実は不安にかられた無我夢中の行動であったようにも思われるのである。このことはたとえばアスキスの次のような表現にみてとれよう。かれは二四年一月一〇日病床から書簡を書いて、同派のW・M・R・プリングルにこう述べていた。「どうもあすのゆくえについてはもう解決ずみのようである。ポールドウィンが辞職しラムゼイ(Ramsay MacDonald)が首相の座につくのだ

ろう。しかしわたしはかれらのうちどちらがいいのか迷っているのだ。ポールドウィンは不信任についての修正動議など簡単にピシヤリとはねつけ、（政治的に）完全に見通しがたたなくなるまで、自分は下院における最大の政党の指導者として陛下の政府を継続するうえで誰よりも道徳的権威をもっているのである、などと宣言することもできる。そしてラムゼイの方も、（政権維持のうえで）可能性のない議会的条件のもとではじめて労働党政府をスタートさせるようなことをおそらく拒絶するかも知れないのである。……労働党にもとより正当に政府を樹立するチャンスを与えてやらなければならない。これについてはそのとおриだと思う。しかしその際には、われわれが新しい連立内閣の構築を画策しているのだと言うような疑念を決して起させないように注意しなければならない⁽¹²⁶⁾と。みられるように、アスキスには一貫した政治方針などなかったのである。むしろかれは状況が読めずいたずらに不安にかられ政治家としてまったく自信を失っていた、とみる方がむしろより真実に近いように思われるのである。

それに状況に対する明晰な展望をもたなかったと言う点では、ロイド・ジョージもまた然りであった。数年前まで自己の立場を反社会主義におき「中道」を呼号していたはずのかれが、いまになってなぜ突然社会主義政権の誕生を歓迎するにいたったのか。これについては綿密な分析と歴史的な再評価が下されなければならないであろう。しかしそれはともかくとして、このときのロイド・ジョージが次のような考えをもっていたことは疑いえなかった。それはこの際労働党に政権をとらせ、同政権にかれ旧来の主張である社会改革を実践させる、そのかぎりにおいて同政権を承認すると言うことであつた⁽¹²⁷⁾。もとより、労働党がそうした政策をとるようコントロールするのは、かれの考えによればそれは自由党である。つまりこの難局において、政治的イニシアチブを握ることのできるのはあくまでも自由党であると言う根拠のないオプティミズム——しかもきわめて便宜的な思惑に、本来リアリストたるロイド・ジョージ

もまた振りまわされていたように思われるのである。アスキスとロイド・ジョージによる労働党政権樹立の承認は、かくて明らかにリーダーシップ無き「決断」にもとづいていたのである。⁽¹²⁸⁾かれらの行動は、同時代人の心の琴線にふれるどころか、どこかで必ずやその行動に対する強烈なしっぺ返しを受けざるをえない安易さ、あるいは不安定要素をふくんでいたと言つてよいであろう。

事実、この自由党指導者たちによる行動の安易さは、労働党が同政権の発足以後、自由党に政治的懸案事項を相談するどころかむしろ意図的に攻撃的な態度をとったことによつてたちまち表面化してしまつた。つまりアスキスやロイド・ジョージの思惑によれば、もともと弱体な新政権は政権維持のため自由党に援助を求め、自由党を慰撫するよきな態度をみせるはずであつた。だからこそ自由党は労働党を支持し同党を政権につけたのである。しかし労働党政権は、逆に思いがけなくも自由党を政局から永遠に追放せんとする姿勢をみせたのである。これにはアスキスやロイド・ジョージもおおいに周章狼狽せざるをえなかつた。

考えてみると、一九二〇年代初頭におけるマクドナルドの政治戦略は、もともといかにして労働党を統治政党の一翼たらしめ、いかにして同党を保守党とともに、二大政党制を運用しうる位置にまでおしあげるか、にあつた。保守党トリーニティが政権をとり労働党が野党となること、これはこの時代のマクドナルドの一貫した夢であり、その意味で自由党はいわゆる「時計の振子」の運動から排除されるべきものとしてかれのなかで位置づけられていたのである。⁽¹²⁹⁾したがつて、アスキスにせよロイド・ジョージにせよ、かれらが自由党は議席のバランスから言つても下院でキャスティング・ヴォートを握れるし、イデオロギー的に言つても「革命的」労働党と「反動的」保守党の両極端を排す立場から強力なイニシアチブをとれる、と目論んだのは明らかに間違いであつた。つまり状況の特徴は、「革命」と「反動」の対立に

あったのではなく、マクドナルド的中道政党とポールドウイン的中道政党が自由党を排しともに政治的争いのサークルを独占しようとするところにあったのである。⁽¹³⁰⁾ 言い換えれば、自由党は三党政治の争いのなかでその立脚の根拠を新しい「二大政党」たる労働党と保守党に奪われつつあったと言うことなのである。自由党指導者たちは、まさしく以上のような状況の特徴を洞察することができなかったのである。そのうえ、マクドナルド自身個人的にもアスキスやロイド・ジョージをふくむ自由党が大嫌いであり、⁽¹³¹⁾ 自由党攻撃を手控える自制心を動かす必要などなかった。だからしばしば指摘されるように、かれらは遠慮なく地方選挙区で自由党組織を蚕食し、自由党一般議員や活動家の心胆を寒からしめたのである。⁽¹³²⁾ 自由党はこれには大変な衝撃を受けた。そこでかれらは三月二五日議会自由党大会で声明を発表し、労働党に警告を与えた。⁽¹³³⁾ しかし労働党は耳をかす気配をみせなかった。六月五日のオックスフォード補選にみられるように、労働党は同地区で候補者をたてれば自由党候補が不利になることを承知のうえであえて候補者をたて、結局二二年と二三年の選挙において自由党が議席を確保していた同地区を保守党に与えてやるような結果をまねいたのである。⁽¹³⁴⁾ 自由党指導者はただただ驚愕し狼狽するだけであつた。

しかしそれでは、アスキスやロイド・ジョージはこうした事態の急変に何らかの有効な手をうち、直ちに巻き返し策を講じることができたであろうか。答えは否である。なぜなら、もしかりに労働党が自由党に従わないのであれば同政権を支持せず下院では同政権の行動にことごとく反対するとかれらが威嚇したとしても、労働党がそれを拒絶すれば「労働党政権」はたちまち瓦解することになり、したがってふたたび総選挙と言うことになる。⁽¹³⁵⁾ ところがそうした事態こそ、ロイド・ジョージを除く自由党指導部の最もいやがるところであつたからである。つまり当時誰れもが知っていたように、自由党は総選挙にたえうる力がなく選挙戦にはきわめて消極的であつた。別の表現でいえば、自

由党ははじめから「労働党政権」をコントロールする力もまた最後の切札もたなかったものであり、マクドナルドなど労働党の指導者たちはこうした自由党の抵抗の限界をよく承知していたと言ふことである。⁽¹³⁶⁾ 自由党のおかれた立場は実にミゼラブルであったと言えよう。

しかし、さらに重要な問題は、こうしてディレンマに落ち入った自由党が、その泥沼状態から脱出しようと苦悶しながらもそれはたせず、しかもその苦悶の過程において同党がかかえていた構造的欠陥の傷口を一挙に広げてしまふ。ここで急速な没落に向つていったと言ふことである。このことに関して論じられるべき点は多岐にわたっている。しかし、とりあえずここでは次の三点が問題になるのではあるまいか。⁽¹³⁷⁾

第一に、労働党の攻勢を前にしてアスキスとロイド・ジョージの対応が食い違い、ふたたび領袖間の対立が起り党分裂の悪夢がひろがったと言ふことである。すなわち自由党と労働党の協力が幻想であることにいちやく気づき、いまや自由党は労働党によって議会のこぼ道を引きずりまわされたあげく「利用価値がないとわかれば屠殺される牛のような」運命に陥っている、⁽¹³⁸⁾と喝破したのはロイド・ジョージであった。そこでロイド・ジョージは四月から六月にかけて一転して激しい政府批判を展開、同時に労働党と訣別した自由党のすすむべき方向を新しい「急進主義政」⁽¹³⁹⁾としての確立にもとめたのである。七月に明らかにされたかれの政策プログラム、『石炭とパワー』(Coal and Power)は昔日の「急進主義者」の面目躍如たる内容をふくんでおり、イギリスは土地・石炭・電力のコントロールによつてはじめて富を享受しようと言ふ革新的色調を帯びていた。⁽¹³⁹⁾ところが、党の方向転換をはかるこうした一連のキャンペーン(Great Liberal Campaign)を進めるに際し、ロイジ・ジョージはアスキスはもとより党幹部の誰れにも相談しなかつた。それゆえ、かれのキャンペーンは指導的党員の冷淡な反応をまねいただけでなく、とくに

イギリス自由党はなぜ没落したか

アスキス派からは非常な反発をうけたのである。⁽¹⁴⁰⁾ しかしもとより、アスキスはじめ同派の人々のこうした反発は、本当はロイド・ジョージの手続き軽視などにあるのではなかった。それは、ロイド・ジョージが土地・石炭・電力の国有化案を明らかにするや党内右派の人々が直ちにこれに警戒心をみせたように、⁽¹⁴¹⁾ あくまでもアスキスのぬきがない「消極主義」がロイド・ジョージの打って出る「積極主義」にたじろぎ、本能的に反発したものにほかならなかったのである。すでに指摘したように、ロイド・ジョージは国民の前に具体的な政策を提示して、それをつねに劇的な形で実現するような政治スタイルを好んでもちいた。そのうえロイド・ジョージの今回のキャンペーンには、かれがこの当時アスキスおよび同派の人々をして「時代遅れのウィッグども」と呼んでいたように、転換期において明確な産業政策も⁽¹⁴²⁾ だせずにまだに貴族主義的な大衆蔑視をもちつづけているアスキス派に対する非常ないらだちと軽蔑心もこめられていた。⁽¹⁴³⁾ ところがアスキスにしてみれば、本来野党たるものは、一九世紀の伝統的手法が範を示しているように決して詳細な政策的プログラムなどを国民の前に掲げてみずからを緊縛してはならない。⁽¹⁴⁴⁾ つまりアスキスの政治スタイルからすれば、ロイド・ジョージの「実験」などあくまでも邪道であり異端的行動にすぎなかったのである。こうして二人の領袖の間には妥協の生れることなど期待できなかった。自由党は政局の重大場面においてふたたびその構造的欠陥を表面化させ、党をいわば空中分解に陥し入れはじめたのである。

第二に、以上のようなリーダーシップの欠除、したがって党分裂の危機と言う状態に関連して、自由党はとくに議会内において政策的対応の無原則ぶりを露呈してしまった。この時代の自由党は、いったいに急進主義政党なのか、反社会主義政党なのか、はたまた自由貿易主義を掲げる穏健な中央党的存在なのか、誰れにもしかとつかめない実に曖昧な性格をもっていたが、⁽¹⁴⁵⁾ ことに一九二四年には労働党政権に対する政策上の基本的態度を定めることができず

——同年五月におけるブライトン党大会 (the general meeting of the N. L. F. at Brighton) の盛りだくさんの政策的羅列にもかかわらず——党はみずから自壊をはやめるのである。下院議会における同党議員団の政策的対応の混乱ぶりについては、C・クックがおおよそ次のように示している。それによれば(i)一九二四年二月、いわゆる「ポプラー討論」(Poplar debate)⁽¹⁴⁵⁾に際して、自由党議員は整然たる投票行動をとることができず賛成組・反対組・欠席組のそれぞれ三つに分裂した。(ii)同年三月、この直後に派生した政府の建艦提案に対しても自由党議員団は足並みをみだし、三つに分裂した。(iii)同じく三月、対ドイツ商品輸入関税の軽減措置に関しても三つのグループに分裂した。(iv)さらに同じく三月、政府がシンガポール軍事基地縮小案をだした際にも自由党議員団は統一して問題に対処することができず分裂してしまった。(v)翌四月、政府は家屋の賃貸法 (Rent Bill) を導入しようとしたが、ここにいたり自由党議員団は同法案の処置をめぐり大分裂してしまった。なお、同法案の採決に際して、アスキスおよびロイド・ジョージは無責任にもわざと欠席し、同党における指導者不在の様相をまざまざとみせつけたのである。(vi)五月、かねてより提出していた一九一八年の国民代表法修正案 The Representation of the People Act (1918) Amendment Bill が労働党政府の冷淡な態度の前に否決され、自由党議員団は大きな屈辱を味わわざるをえなかった。(vii)さらに同じく五月、保守党議員が失業問題処理に失敗した労働大臣のサラリー削減提案をしたとき、自由党議員団はまたしても分裂した対応しか示しえなかった。(viii)六月には帝国内特恵関税論争がもちあがった。しかし自由党議員団のなかには、これに関しても最後まで勝手に投票行動するものがあつた。(ix)七月、ふたたび労働大臣サラリー削減提案がだされた。しかし自由党議員団は依然として統一した対応をみせることができなかった。(x)その他、農業問題のとりあつかいについても自由党議員団の態度はそれほど明確ではなかった。⁽¹⁴⁶⁾以上のようにして、下院において自由党議員は、

イギリス自由党はなぜ没落したか

ことごとく分裂し支離滅裂な行動しかとれなかったのである。転換期においてかれらがいかに動揺しいかに党の没落を食いとめることができなかつたか、これらはその象徴的なできごとであつたと言えよう。

第三に党中央における財政的逼迫、それに伴う候補者難、党員の士気の低下によって、議会外の党「組織」が急速に崩壊しはじめた。これは実に致命的な出来事であつた。⁽¹⁴⁷⁾まず財政上の危機に関しては、過去二回の総選挙がおおきくひびき党中央（アスキス派）の資金が完全に払底してしまつた。ところが自由党では、地方組織は組織の運営に關してもまた選挙を戦う場合においても財政的には党中央に依存する形をとつていた。したがつて党中央の資金上の逼迫は、ただちに同党組織の全国的な崩壊を意味したのである。もっとも、首相在職当時よりさまざまに献金を蓄積していたロイド・ジョージは、党財政とは別にいわゆる「ロイド・ジョージ基金」と称される潤沢な政治資金を独自で保持して⁽¹⁴⁸⁾いた。したがつてここに、「ロイド・ジョージ基金」引きだしをめぐるアスキス派とロイド・ジョージ派のきわめて生臭い、しかし党の将来を制する深刻な交渉がはじまつたのである。しかしこの交渉はロイド・ジョージの資金齟出拒否によつて結局は不調に終つた。ロイド・ジョージの言いぶんによれば、目前の資金ほしさに躍起となるだけで各地方組織が財政的に自活できるような道を確立しようとせず、党組織全体の腐敗を放置している党中央に、現在の段階で資金を提供することはおよそナンセンスである、と⁽¹⁴⁹⁾言うことであつた。かくてアスキスがのちに使つた言葉を借用すると、この一連の交渉の過程は、自由党の統合が「たとえ茶番劇ではなかつたとしても一つのフィクションであつた⁽¹⁵⁰⁾」ことを黨員すべてに強く印象づけたのである。しかしいづれにせよ、党中央の財政がこのように枯渴し、しかも党の財源を伝統的に支えてきた富裕階級がなだれを打つて保守党に走っている以上、⁽¹⁵¹⁾党がきたる選挙戦で最前線に立つべき候補者の選出に難渋したのは当然であつた。党は戦える状態ではなくなつていたのである。たとえ

ばミッドランドにおける七六選挙区において、自由党は一九二四年春までにわずか九名の候補者しか準備できなかった。同地域においては、明らかに勝てるはずの選挙区でもなかなか候補者をみつけることができなかった。ことに深刻なのはウェールズ、スコットランドであった。これらの地域では、二四年九月頃になっても依然として候補者をたてられない地区、もしくは候補者と目される人々の辞退する地区が続出した。⁽¹⁵²⁾一九二四年の自由党にとってはこうした事態は決して誇張でなく全国的な傾向であったのである。同党は同年一〇月に行なわれる総選挙で最終的に三三九名の候補者を擁立することができる。しかしそれも議会解散時においてはわずかに二八〇名の候補者しか集められなかった⁽¹⁵³⁾のであり、またやっと集められた三三九名と言う数字にしても前年度二三年総選挙時の候補者四五七名と比較すると一一八名も減少した数字であったのである。自由党はまさしくその内部から崩壊しつつあったと言って決して間違いでないであろう。したがって、当然のことながらこのことがまた黨員間に憂鬱な雰囲気をかもしだし、かれらの士気を著しく低下させていたことについては、今さら強調するまでもないであろう。以上を繰り返して述べると、自由党は労働党の大攻勢の前に抵抗しうるところか、逆に党財政を枯渇させ、候補者を選出できず、脱党者を続出させ、黨員の士気を沮喪させる、と言う実に惨憺たる状態をまねいていたのであった。⁽¹⁵⁴⁾

一九二四年の自由党は、みられるように實際急速な「没落」に向っていたのである。もともと「労働党政権」の成立と言う転換期にあって、自由党のなすべきことは山積していたはずであった。右に述べてきたこととの関連で言うと、アスキス派とロイド・ジョージ派の対立を克服して強力なリーダーシップを確立すること、産業の分野から外交の分野にわたる包括的かつ建設的な政策提言をすること、組織体制を再点検し黨員の士気を高めること、などがそれであった。⁽¹⁵⁵⁾ところが自由党は、これら誰れがみても明らかに必要な任務の遂行をすべて完全におこたってしまった

のである。同じく野党の立場にあった保守党が、このときポールドウインの指導のもとに党内抗争を終息させ、組織再建に努力し、「新保守主義」と称する一連の意欲的な政策プログラムを提示し、国民に再生保守党のイメージをうえつけることに成功したの⁽¹⁵⁶⁾とくらべると、自由党の右の対応はあまりにもお粗末にすぎたと言えよう。その意味で、同党は外部勢力などによって没落させられたのではなく、あくまでもみずから没落すべくして没落に向っていったと言えるのである。これが自由党の実像であった。

さて、一九二四年一月に成立した労働党政権は、もともと少数政権であり、つねに崩壊の危機に直面していた。この少数政権の崩壊は、いくつかの政治的争点の積み重ねによって派生したが、そのうち決定的な転回点となったものは周知のように九月休暇あけの議会で一挙に過熱化した対ロシア通商条約問題と「キャンベル事件」とであった。二つの問題とも野党たる保守党の態度をいちじるしく硬化させ、同党を政府打倒にふみ切らせたのである。自由党はこれらの問題の処理に関してはときにあいまいな態度をみせたが、しかしロイド・ジョージが対ロシア通商条約問題に關して断乎たる政府批判を展開したこともあって、結局同党は保守党に同調し、客観的に労働党政権打倒に一役をかうことになった。かくて労働党政権はわずか九ヶ月あまりで崩壊することになるのである。議会は一〇月九日に解散され、投票日は一〇月二十九日に設定された。これは一九一八年以来四度目の総選挙であったが、少なくともこの選挙を通じて過去五年間の各政党の足跡とその業績に国民の厳しい審判が下るはずであった。

この一九二四年における総選挙は、今日振り返えてみるといくつかの点で歴史に記憶されるべき特異な性格を有していた。たとえば、史上初の社会主義政権の統治能力を国民がどう評価したかと言うような問題がそれであるし、あるいはしばしば指摘されているように、この選挙において初めて使用されたラジオが国民の政治に対するイメージ

にどのような影響を与えたか⁽¹⁵⁷⁾と言う点などもそれである。しかし総選挙の実際の姿は、保守党が仕掛けたすさまじいばかりの反共宣伝が示すように、決して今日考えられるような綺麗事には終らなかつたのである⁽¹⁵⁸⁾。投票日の直前に勃発したいわゆる「ジノーヴィエフ書簡事件」など、今回の選挙がいかに非難と中傷に終始したか、その象徴的な出来事であつたと言えよう。一九二四年を通じ党内右派の跳梁を押えることに苦慮し、しかも最初から最後まである種の冷静さを失わなかつたポールドウィンでさえ、選挙演説ではジノーヴィエフ書簡問題に言及し、労働党を批判しなければならぬぐらいの雰囲気であつたのである⁽¹⁵⁹⁾。しかしそれにしても、ここで強調されなければならないのは、やはり一九二四年の選挙においては、保守党と労働党とがこのように真正面から激突したがゆえに、自由党の存在が完全にかすんでしまつたと言ふことであらう。自由党は保守党と労働党の間であつて個性ある戦いをすすめることもできず、したがって国民に何らの強い印象も与えることができなかったのである⁽¹⁶⁰⁾。それに想起しなければならないのは、組織崩壊と士気の低下に呻吟している同党が、選挙戦に突入した時点においてもいまだに党内の不協和音を払拭していなかつたと言ふことであつた。ロイド・ジョージ系の新聞『デイリー・クロニクル』(Daily Chronicle)が自由党と保守党の提携を主張しているのに対して、同じく自由党系の新聞『デイリー・ニューズ』(Daily News)が黨員によびかけて、状況に応じ労働党を支持してもよいが、しかし保守党候補に対しては断じて反対票を投ぜよと呼号してゐたことなど⁽¹⁶¹⁾、明らかにその一例であると言えよう。自由党はときには右にときは左に傾き、最後までいわば状況にもてあそばれてゐた観がなくもなかつたのである。いずれにせよ、一九二四年の総選挙において自由党の崩壊を予想させる不安材料ははじめからいたるところに山積してゐたと言つてよかつたのである。

総選挙の結果は、予測にたがわず保守党の圧勝、労働党の敗北、そして何よりも自由党の完敗として明らかになつ

た。保守党は前回より一五四議席をふやし四一二の議席をもってみごとに政権を奪還することができた。これに対して労働党は、前回の獲得議席一九一から四〇議席を失い一五一議席をえるにとどまった。しかし同党の場合は、前回より得票率をふやしており（前回三〇・七％、今回三三・三％）、必ずしも明るい材料に欠くと言うわけではなかった。しかし絶望的なのは自由党であった。同党は前回一九二三年においては一五八議席をえ、かろうじて「統治政党」としての体裁を保つことができた。しかし今回はそれから一一八議席も失い全部でなんとわずか四〇議席の少数政党に転落してしまったのである。⁽¹⁶²⁾ それにロイド・ジョージ、A・モンド、J・サイモンなどを除いて、同党の指導者はほとんど例外なく落選した。落選者にはアスキスを始めとしてT・J・マクナマラ、J・シェリー（J. Seely）、W・M・R・プリングル、G・ランバート、L・ジョーンズ（L. Jones）、G・ハワード、I・フート（I. Foot）、E・L・スペアーズ（E. L. Spears）などがふくまれており、⁽¹⁶³⁾ これによって自由党指導者層はほぼ下院から一掃されたと言って過言ではなかったのである。かくて一九二四年の総選挙は、イギリスにおける伝統的な「統治政党」たる自由党を永遠に失墜させる総選挙としてあらわれた。第一次大戦後、二人の領袖の反目と対決から発してただ荒廃するにまかせられた自由党の、これが政治的帰結であった。自由党はついに没落をよぎなくされたのである。

五 別 離

総選挙を振り返ってみると、アスキスとロイド・ジョージはもはや国民的指導者などとはとても言えないような行動しかとっていないかった。一〇月一四日、二人はロンドンのクイーンズ・ホールでともに第一声をはなったものの、その直後にはやばやと自分たちの選挙区に帰ってしまっていたのである。それでも、ロイド・ジョージの方は自分の

選挙区であるウェールズのカナーヴォン (Caernarvon) に帰ったのち、ウェールズ各地を演説しさらに一時北はブラックバーン (Blackburn) から南はチチニスター (Chichester) まで遊説の足をのびた⁽¹⁶⁴⁾。しかしアスキスの方はみるも無惨であった。保守党のポールドウィンがラジオを通じて、国民の前にきわめて効果的にその政策を喧伝し、またマクドナルドが自動車行脚によって全国に旋風をまき起し首相としての貫禄を示しているとき⁽¹⁶⁵⁾、アスキスは最初から最後まで自分の選挙区ペイズレーを一步も動かず、まるで一平議員のように自己の選挙しか考えなかったのである。たしかに、ペイズレーが今回は前回にくらべてきわめて厳しい状況にあったのは事実であった。二三年の選挙で分裂した労働党が同地区でこんどは一体となってアスキスに挑戦しており、アスキスとしては前回の保守党票を全部もらわねばとても当選できるような状態になかったからである。しかしその点を考慮に入れたとしても、アスキスがペイズレーの保守党員の御機嫌を伺うため、かれ本来の政治的主張をわすれて、いまや「伝統的な二つの政党が共同の敵の脅威をうけている」などと発言するにいたったのは、明らかに醜態であった。「共同の敵」論なるものは、もともとロイド・ジョージが主張していたものであり、この言説を強く非難しつづけたのは、ほかならぬアスキス自身であったからである。いずれにせよ「自由党党首」アスキスの行動は一九二四年におけるわずか九ヶ月の間に、労働党を支持するかと思えばこんどは保守党を支持すると言うまさに支離滅裂なものであった。かれは現実には自由党の指導者どころか、ペイズレーの候補者としてただ自己の議席をまもることに狂奔する倭少な人物に変貌していたのである⁽¹⁶⁷⁾。

それにしても、一九二四年の総選挙は自由党にとってはその没落の挽歌であり、同時にそれは今世紀の同党を指導してきた二人の領袖が政治的に完全にその生命をたたれたことを示す、一つの大きな記念碑であった。二人の指導者

は党内外の期待を一身に担いながら登場し政局にのぞんだ。しかしかれらは右にみてきたように五年にわたる不毛な対立と抗争をつづけ、結局は党を没落におしやり、ともに凋落してしまったのである。この二人の対立と抗争は、社会主義者の擡頭と保守主義者の反撃と言う激動の時代にあつて、おそらくは状況に対応しようとして逆に二つに引き裂かれてしまった自由主義者の悲劇を象徴的にあらわすものであつたと言えよう。過去の先例をただ忠実に遵守する伝統的政治家としてのアスキスも、また革命的ロマンチストではあるけれどもつねに左・右に揺れ一貫性を欠いたロイド・ジョージも、ともに国民の期待に答え状況を乗り切つてゆくだけの政治的力量に欠けていたからである。ともあれ自由党は二人の指導者とともに終つてしまった。二人の指導のもとに興隆し、かれらの対立とともに没落してしまつたのである。

なおこれ以後、一九二〇年代後半にいたる自由党がその復興に何らの展望ももてなかつたことについては、以上述べてきたことからして容易に想像されることであろう。実際、二四年の選挙前からひそかにロイド・ジョージに期待をよせていた党の理論的指導者C・P・スコットなども、選挙後党内での指導権をえようとして躍起になつてくるロイド・ジョージをみて絶望せざるをえなかつた。またスコットは、敗北のときにあたりもう一度党員を糾合すべき責任を負うアスキスがそれもせずさつさとエジプトとスーダンへの旅にでてゆくのをみてかれにも深い絶望感をおぼえたのである。⁽¹⁶⁸⁾このスコットの幻滅感にみられるように、復興の気運など事実党内のどこにも感じられなかつたのである。選挙で落選したアスキスは「もうこれ以上君を政治の修羅場にだしたくない」と言う国王の配慮によつて貴族の席に列せられ上院入りをすることができた。⁽¹⁶⁹⁾しかし、オックスフォード伯となつたいまでもかれはなお党首のポストを離さず、しかも政治的には無力であつた。他方、主導権を握ることのみを熱望したロイド・ジョージは一九二四年

一二月やっとな願の自由党下院議員団長となることができた。しかし数少ない同党議員団のなかには、ロイド・ジョージのこの就任をどうしても認めようとしなない九名の議員がおり、かれらはここでW・ランシマン(W. Runciman)のもとに「急進派」(Radical Group)を結成するにいたる。つまり選挙後、党は一時アスキス派とロイド・ジョージ派それにランシマン派の三つに分裂し、解体化の様相を一層つよめたのである。⁽¹⁷⁰⁾これでは仮に党再建をはかったとしても、誰れしもその糸口すらつかめなかったと言えよう。党内における権力争いは、これ以後もN・L・Fの執行委員会の醜いポスト争いなどにみられるように、依然としてアスキス派とロイド・ジョージ派の二派を中心として続けられた。そしてそれら抗争にもとづく党分裂の危機は翌一九二五年にもちこされ、さらに周知のようにそれは一九二六年のゼネストの対応をめぐるクライマックスに達するのである。ゼネストに対して政府支持側にまわったアスキスは、ストをうった労働者に好意的なロイジ・ジョージをみてもはや妥協の余地はないと思った。しかも党の下院議員団長と言う要職にありながら、この問題をめぐる自由党「陰の内閣」のあつまりに意図的に欠席するロイド・ジョージの行動を前にして、アスキスは以後二度とふたたびかれと直接話しあうようなことはすまいと決意した。⁽¹⁷¹⁾プライベートな会合でも、もはやロイド・ジョージとの別れの時であることを告げたのである。⁽¹⁷²⁾しかしこの時、指導権をめぐる争いは大逆転をよぎなくされる。それは二六年六月、アスキスが同月に開かれる予定の党大会(the general meeting of the N. L. F. at Weston-super-Mare)を前にして突然病にたおれ、きたる一〇月には辞任することを申しでざるをえなかったと言うことであつた。⁽¹⁷³⁾こうしてアスキスは時を逸してロイド・ジョージ追放に失敗した。しかしアスキスのあとを襲い名実ともに党の権力をにぎったロイド・ジョージもまた、権力をにぎってはじめて党再建を開始するには、あまりにも遅きに失していたのである。⁽¹⁷⁴⁾二人の領袖がすでに精神的に完全に離別していたことについ

イギリス自由党はなぜ没落したか

てはいまさらとりたてて強調するまでもないであろう。

アスキスは病にたおれたのも二六年一〇月一四日にいたり、あまりにも長すぎる在任ではあったがやっと正式に党首の座をおりた。党首辞任後、かれは一時ゴルフを楽しめるまでに健康を回復することができた。それに読書と回想録 (*Memories and Reflections*) の執筆にいそむほか、観劇や展覧会などにも足繁くかよい、小康をえておだやかな日々をすごすことができた。しかし病状は次第に悪化、一九二八年二月一五日ついに七六歳の生涯をとじたのである。⁽¹⁶⁾ 党首の座を辞して一六ヶ月後であった。アスキスの死に接して、ロイド・ジョージはただちに談話を発表し、「偉大な大義のためにも働いたわれわれのあの愉快な……そして実り多き協力の日々」について語った。ロイド・ジョージは翌一六日にふたたび下院で演説して、アスキスの政治的生涯に賛辞を呈するとともにかれへの別れの言葉を述べた。⁽¹⁷⁾ しかし二人は本当はずで一九二四年、自由党の没落とともに別離していたのである。二八年二月一六日の下院におけるロイド・ジョージの弔辞は、その意味で旧友との別れを惜む追懐の情の吐露にはかならなかった。

- (1) Cf. J. Campbell, *The Renewal of Liberalism: Liberalism without Liberals*, in Gillian Peele & C. Cook (ed) *The Politics of Reappraisal 1918-1939* (1975) p. 88.
- (2) Cf. Stephen Koss, *Asquith versus Lloyd George: the Last Phase and Beyond*, in Alan Sked and C. Cook (ed) *Crisis and Controversy: Essays in Honour of A. J. P. Taylor* (1976) p. 73.
- (3) 同上 Stephen Koss, *Ibid.*, pp. 71-72.
- (4) Stephen Koss, *Ibid.*, p. 73.
- (5) Stephen Koss, *Ibid.*, pp. 73-74.
- (6) なおこの「一九一六年二月の政変」については、しばしばロイド・ジョージによる陰謀説や単なる善玉・悪玉論などで説明されがちである。しかし A. J. P. ティラー (Taylor) はじめ多くの歴史家が指摘しているように、最近ではそう

した説明は、いずれも俗説としてしりぞけられている。この点については、とりあえず C. Cook, *A Short History of the Liberal Party 1900-1976* (1976) p. 69 参照。

(7) C. Cook, *Ibid.*, pp. 71-73.

(8) C. Cook, *Ibid.*, pp. 70-72.

(9) C. Cook, *Ibid.*, pp. 71-72.

(10) ちなみに、アスキスとロイド・ジョージは従来からさまざまな評価をうけ、自由党の没落との関連で論じられる場合でも二人を客観化して考察することは必ずしも容易なことではなかった。後世の歴史家や政治家たちは、二人の評価に関してはしばしば冷静さを欠き、どちらか一方を激しく批判するか、または激賞すると言うようにはなはだ偏った見解を示すのがつねであったのである。しかしこれも、時代の流れとともに一つの評価の傾向と言うものがあつた。ふたたび右に掲げた S・コスの論文によればそれはこうである。

まず両者の死後、はじめ称讃の対象となつたのはアスキスであつた。たとえば、M・ケインズ (M. Keynes)、『H・ニコルソン (H. Nicolson)』、『G・マレー (G. Murray)』、『J・A・スペンダー (J. A. Spender)』、『A・G・ガーディナー (A. G. Gardiner)』などはみな熱烈なアスキス・ファンであり、かれらは一様に権力者ロイド・ジョージを嫌悪しその道徳的腐敗を糾弾した。かれらはアスキスを「最後のローマ人」とよび、シーザーに譬える一方で、ロイド・ジョージを現代のブルータスとみなして後者をしりぞけたのである。それに一九四五年ロイド・ジョージが八二歳で死去したあとさまざまな回顧録が刊行されたが、そうした回顧録のたぐいがでればでるほどかれの評判はかんばしくなく、息子ですら「ロイド・ジョージと言う名前そのものが私的にも公的にもデカダンスと同義語になつたように思われる」と公言するしまつであつた。だから、自由党の正統派をもって任じる人々は、自由党のイデオロギーの源泉をロイド・ジョージにもとめることなど全くなかつた。かれらは、それをグラッドストーン (Gladstone) や J・ブライト (J. Bright) やキャンベル・バナマン (Campbell-Bannerman) やアスキスや、またときにはサイモンや S・ボールドウィンにまでもとめたけれども、ロイド・ジョージには一瞥も与えなかつたのである。ロイジ・ジョージは無頼漢でありかれこそ自由党の背教者である、と考えられたからであつた。

ところが、一九六〇年代に入るやこのような評価の仕方は一変する。すなわち、こんどは逆にアスキスが多くの人々の批

イギリス自由党はなぜ没落したか

同志社法学 三三卷三・四号

三三三 (七一七)

判の対象になるのである。六〇年代以降の歴史家は、一様に第一次世界大戦におけるアスキスの戦争指導者としての無能力さを指摘し、一九一六年の党分裂に関してもむしろアスキスに責任あり、と論ずるようになった。これは逆に言えば、ロイド・ジョージの評価をたかめると言うことにほかならなかった。ロイド・ジョージの個人的なスキャンダルでさえも、かれの人間くささをあらわすものとして親似感さえもたれるにいたったのである。このアスキス批判の下敷は、もともとビーバーブルック (Lord Beaverbrook) の *Men and Power* (1956) によってつくられていたが、六〇年代にこれを敷衍し、かつ決定的に「アスキス神話」を破綻したのは A・J・P・テイラーの *Lloyd George: Rise and Fall* (1964) Leslie Stephen Lecture で講義され、のちにかれの *Politics in Wartime 1964* に収録された) であり、さらにかれの *English History 1914-1945* にもあった。これ以後、テイラーのロイド・ジョージ再評価論は、かれの周辺に集り当時のビーバーブルック・ライブラリーのロイド・ジョージ文書 (現在は「上院図書館」に移管) を利用した一群の若い研究者たちにひきつがれ、さらに大きく開花したと言ってよい。テイラーの編集になり、かれの薫陶をえた人々の執筆になる A・J・P・Taylor ed. *Lloyd George: Twelve Essays* (1971) はその一つの業績である。これ以後、ロイド・ジョージの伝記は巷にあふれてもアスキスのそれは一・二を除いてすっかり影をひそめることになるのである。こうして二人の評価は逆転する。

なおテイラー以後、ロイド・ジョージ評価に寄与した歴史家には主としてつぎのような人々がいる。すなわち、A・M・ゴリン (A. M. Gollin)、『M・ギルバート (M. Gilbert)』の *ロスキル (S. Roskill)*、『A・F・クラーク (P. F. Clarke)』、『B・B・ギルバート (B. B. Gilbert)』、『N・ブレウエット (Neal Blewett)』、『A・B・ジョーンズ (P. B. Johnson)』、『C・ハズルハースト (C. Hazlehurst)』、『M・カウリング (M. Cowling)』、『A・スキデルスキー (P. Skidelsky)』、『J・タリット (J. Grigg)』などである。これに對して T・ウィルソン (T. Wilson) の *自由党の没落 (The Downfall of the Liberal Party 1914-1935, 1966)* なども注目だが、しかし R・ダグラス (R. Douglas) の *ウィルソン批判 (R. Douglas: History of the Liberal Party 1895-1970, 1971)* にも注目される。最近では一層ロイド・ジョージ再評価が定着したように思われる。それらに K. Morgan ed. *Lloyd George: Family Letters 1885-1936* (1973) や T. Wilson ed. *The Political Diaries of C. P. Scott 1911-1928* (1970) などによって加速された。ようするに、アスキスとロイド・ジョージの評価にはこれだけの紆余曲折があったのである。S. Koss, *op. cit.*, pp. 66-71.

(11) 自由党の没落に関しては古典的には周知のように G. Dongerfeld, *The Strange Death of Liberal England* (1935) がある。しかし G・D・H・コール (G. D. H. Cole) などをはじめとして、最近ではほとんどが産業構造の変化や都市化などの動きと関連させて論じている。前出の T・ウィルソン、これに P・F・クラーク (P. F. Clarke, *Lancashire and the New Liberalism* 1971) や C・クック (C. Cook, *The Age of Alignment: Electoral Politics in Britain 1922-1929*, 1975) などはその典形であると思われる。

(12) 自由党の没落の原因については、本文に示唆したような社会・経済構造の転換の問題以外に、実際にはのちに若干ふれる同党の政策・組織・財政などをさまざまな側面をみなければならぬ。つまり「没落」はある一つの原因にともなうのではなくあくまでも複合的な要素が複雑にからまって生じたものだからである。(C. Cook, *op. cit.*, pp. 342-343) 本稿ではそれをとおりあえず指導者間の争いの問題を中心にみてゆこうとするものである。

(13) H. H. Asquith, *Memories and Reflections 1852-1927* Vol. II (1928) pp. 164-165.

(14) Quoted in R. Jenkins, *Asquith* (1964) p. 477.

(15) H. H. Asquith, *Memories and Reflections* p. 170.

(16) Cf. T. Wilson, *The Coupon and the British General Election of 1918* *Journal of Modern History* 1964. p. 28. なお、一九二〇年代初頭におけるアスキスとロイド・ジョージの抗争を論じ、主としてアスキス弁護にたつ人々が注目するのは、一つは以上の点である。たとえば右にあげた T・ウィルソンなどはその典形であるように思われる。T・ウィルソンの主張によれば、ロイド・ジョージが「自由党」に見切りをつけ保守党と連合しようとしたのは、もともと策謀家ロイド・ジョージの予定の行動であった。ロイド・ジョージははじめから自己の権力の固定化を意図して躍起になっていたのであり、クーポン配付はそれを証明するエピソードのひとつにすぎない。(Cf. T. Wilson, *The Downfall of the Liberal Party 1914-1935* pp. 159-166) したがって、このクーポン配付などを考えれば「一九一六年一二月にとられた政治的処置も単なる戦時下の一時的即興などでなく、分離の瞬間であった」(T. Wilson, *Ibid.* p. 159) と言うことがわかる。つまり自由党分裂の責任は、実はロイド・ジョージにこそある。T・ウィルソンはたとえこのような論理を展開するのである。しかし筆者は、以下本文でも若干示唆するように必ずしもこうした考えには同意することができない。

(17) 以上詳しくは、拙稿「イギリスにおける一九一八年総選挙とその意義について」『同志社法学』第一四七号。

- (18) Roy Jenkins, *op. cit.*, p. 480.
- (19) H. H. Asquith, *Memories and Reflections* p. 173, p. 178.
- (20) Roy Jenkins, *op. cit.*, p. 481.
- (21) *The Liberal Magazine*, March 1919, pp. 89-90, *Gleanings and Memoranda*, November 1918-May 1919, p. 25.
- (22) *Gleanings and Memoranda* November 1918-May 1919, p. 25.
- (23) T. Wilson, *op. cit.*, p. 203.
- (24) Cf. J. Campbell, *Lloyd George: The Goat in the Wilderness* (1977) p. 57, Cf. R. Douglas, *op. cit.*, pp. 139-140. ただし、この当時のアスキス派の実情が氣息奄奄たるものであったと言ふ説については M. Cowling, *The Impact of Labour 1920-1924* (1971) pp. 96-100.
- (25) もっとも自由党の分裂と言っても、アスキス派とロイド・ジョージ派に所属する人的構成の点からみるとそれははなはだあいまいな性格をもっていた。たとえば戦前アスキスは Liberal Imperialist として党のウィッグ的右派の代表であった。これに対してロイド・ジョージは親ボーア (Pro-Boer) の立場をとり党内左派 New Liberal をその傘下におさめていた。ところが大戦が勃発するや、ロイド・ジョージは逆に愛国主義者に変じ、かつての Liberal Imperialist 集団を自己の派閥におさめたのである。つまりアスキス派、ロイド・ジョージ派と言ってもその内容は状況に応じてつねに流動的であった。以上 J. Campbell, *op. cit.*, pp. 57-58.
- この傾向は戦後においてもまたみられたのである。ことに一九一八年の総選挙が終ってからしばらくはそうした混乱が随所に見られ、下院議員の陣笠レベルにおいては一体誰がアスキス派で、誰れがロイド・ジョージ派に属すのかが必ずしも判然としなかった。それに一九一九年の春、両派が「統合」問題をめぐってさかんに交渉を重ねているとき、自分が「アスキス派」とか「ロイド・ジョージ派」とかよばれるのを非常に嫌った人々がいたのも事実であった。もっとも、これも次第に色わけされるようになる。しかし当初、どちらの派閥に属すのかを自覚してそれぞれ政争の場にあったのは実際には少数の指導者層に限られていたようである。以上 R. Douglas, *op. cit.*, pp. 133-138, Stephen Koss, *Asquith* (1976) p. 240.
- (26) K. O. Morgan ed, *Lloyd George: Family Letters 1885-1936* (1973) pp. 188-189.
- (27) 「現実主義者」ロイド・ジョージは保守党と提携し「連立内閣」を構築するアイデアをもちつづけると同時に、幅広くア

スキス派の支持もえることを考え、人を介して幾度もアスキスに和解の提案をしている。ロイド・ジョージはまず一九一八年九月にかれに大法官の地位を提供しようとして拒絶された。さらに選挙直前にも、ロイド・ジョージはふたたびこの提案をかれ自身が直接アスキスに示し妥協を懇請した。また幾つかの閣僚のポストをアスキス派に用意することも明らかにした。しかしこれも拒否されたのである。 Cf. R. Blake, *The Unknown Prime Minister* (1955) pp. 386-387, A. J. P. Taylor, *English History 1914-1945* p. 171. 都築忠七訳『イギリス現代史』I みず書房 一三三頁。

(28) T. Wilson, *op. cit.*, pp. 195-196, A. J. P. Taylor, *op. cit.*, p. 172. 都築忠七訳 前掲書 I 一四頁。 M. Kinner, *The Fall of Lloyd George: The Political Crisis of 1922* (1973) pp. 37-41.

(29) J. Campbell, *op. cit.*, p. 14.

(30) Cf. A. J. P. Taylor, *op. cit.*, pp. 178-179. 都築忠七訳 前掲書 I 一八一-一九頁。

(31) C. Cook, *A Short History of the Liberal Party 1900-1976* p. 77.

(32) 『カーニン・サマー』とはロイド・ジョージの私的な政策立案集団につけられた名称である。これは、かれらの事務所がセント・ジェームス公園に続く首相官邸の裏庭に位置していたから、そう呼ばれるようになったものである。 Cf. C. L. Mowat, *Britain between the Wars 1915-1940* p. 14.

(33) C. L. Mowat, *Ibid* p. 8.

(34) Stephen Koss, *op. cit.*, p. 243.

(35) Roy Jenkins, *op. cit.*, pp. 484-485.

(36) H. H. Asquith, *Memories and Reflections* p. 180.

(37) Roy Jenkins, *op. cit.*, p. 488.

(38) A. J. P. Taylor ed, *Lloyd George: A Diary by Frances Stevenson* (1971) pp. 203-204, Stephn Koss, *op. cit.*, p. 248.

(39) H. H. Asquith, *Memories and Reflections* p. 186.

(40) M. Cowling, *op. cit.*, p. 100.

(41) *F. Stevenson's Diary* pp. 205-206, Stephen Koss, *op. cit.*, p. 249.

(42) Cf. Stephen Koss, *op. cit.*, p. 250.

- (43) 以上 Stephen Koss, *op. cit.*, pp. 249-252. ちなみに、ステイブーン・コスはこの当時のアスキスについて次のような厳しい見方をする。すなわち、アスキスはペイズレー補選前後から実は一貫して政治冬眠状態からさめず、まったくその活力を失っていた。かれがペイズレー補選に立候補するにいたったのも、本当はその背後に領袖アスキスのいつまでも煮え切らない態度に痺れを切らした同派議員の激しいつきあげがあったからである。したがって補選の様相も実際には、はなはだ精彩を欠くものであったし、同派の幹部の幾人かは、はっきりと補選の推移に不満を表明した。しかも、このアスキスのやる気のなさはかれの議会復帰後もつづき、『パンチ』(*Punch*)誌などはこれを見て、アスキスを「いやいやながらのおでまし」と揶揄したぐらいであった。二〇年八月にいたるや、J・M・ホッジなどはついにD・マクリーンに対してアスキスに代って同派の指揮をとるよう要請するしまつであったし、D・マクリーンもまた同年八月一〇日アスキスにともない首相官廷を訪れたときのアスキスのロイド・ジョージに対する対応をみて、絶望的な思いにかられたのである。この八月一〇日ロイド・ジョージはアスキスにきわめて丁重なうやうやしい態度をとり、二人はまるでアスキスが首相でロイド・ジョージが蔵相であった昔のごとく、つまり何事もなかったように和気あいあいと談笑に興じたのである。アスキスは表面はともかく基本的にはロイド・ジョージに対する闘志を完全に失っていたのではないか、こうS・コスが主張するのである。以上 Stephen Koss, *op. cit.*, pp. 244-250.

(44) Quoted in Stephen Koss, *op. cit.*, p. 259. 同じくかれの Asquith versus Lloyd George: the Last Phase and Beyond, in A. Sked and C. Cook ed, *Crisis and Controversy: Essays in Honour of A. J. P. Taylor* p. 74.

(45) H. H. Asquith *Memories and Reflections* p. 194.

(46) これはN・チャムズレン(N. Chamberlain)の言葉である。 Cf. Ivor Jennings, *Cabinet Government* (1969) p. 188.

(47) 「中央党」結成の構想は、この当時ロイド・ジョージが中心となってW・チャーチルやロイド・ジョージの保守党内における盟友バーケンヘッド(F. E. Smith, Earl of Birkenhead)などとともに打ちだした積極的な状況打開策であるが、しかしロイド・ジョージは首相の座にあったため必ずしもかれ自身がおもてださず同構想の推進に動きまわったわけではなかった。同構想をハデに打ちだし政局に衝激を与えた実動グループはむしろバーケンヘッド、チャーチル、それにC・アディソン(C. Addison)などであった。かれらの考えはこうである。たまたま *Gleanings and Memoranda* July 1919. p. 168.

The Liberal Magazine February 1920. を参照。また C. Cook, *op. cit.*, p. 78. を参照。

- (48) ロイド・ジョージの問題について「考へておいては」とりもたず T. Wilson *op. cit.*, p. 209, *The Liberal Magazine* April 1920. p. 140. なを参照。
- (49) R. Blake, *op. cit.*, pp. 416-417, C. Cook, *op. cit.*, p. 78.
- (50) T. Wilson, *op. cit.*, pp. 212-213, R. Douglas, *op. cit.*, p. 148ff C. Cook, *op. cit.*, p. 80. 詳しは Cf. *The Liberal Magazine* June 1920. p. 275 ff.
- (51) R. Douglas, *op. cit.*, pp. 148-149.
- (52) R. Douglas, *op. cit.*, pp. 149-150, T. Wilson, *op. cit.*, p. 215. ただしロイド・ジョージ派の組織づくりはきわめて難航し、形成された「組織」と言っても実際にはほとんど機能していなかった。一九二二年三月においても、同派のある議員はロイド・ジョージに不満をぶつけ、ウェールズを別とすれば選挙区レベルでの組織は現実には「存在していないか、それともきわめて不十分である」と述べている。結局ロイド・ジョージは組織の人ではなく、プロパガンダの人であったのである(以下 R. Douglas, *op. cit.*, pp. 149-150)。このロイド・ジョージ派の組織的欠点は一九一八年から一九二二年にいたる補選において同派の候補者が次々と労働党の候補者に敗北すると言う結果となって露呈した。保守党が自由党ロイド・ジョージ派との政治的提携に疑問をもちはじめ訣別にいたったのも、一つはこの同派の組織的欠点が明らかになったからであった(C. Cook *op. cit.*, p. 79)。
- (53) R. Douglas, *op. cit.*, p. 150.
- (54) R. Douglas, *op. cit.*, pp. 151-152.
- (55) C. Cook, *op. cit.*, p. 79.
- (56) R. Douglas, *op. cit.*, p. 152. なお、自由党員の労働党への入党は戦前からみられた現象であったが、この傾向に拍車をかけたのはやはり戦後であった。こうした元自由党員である知識人グループにはことに外交問題に関心をもつ者が多く、政策立案にあたって国際問題と国内問題を結びつけて考えるべきであると主張し、労働党に新しい知的雰囲気をもたらした。これらの多くが戦後労働党の外交政策立案の中心的存在となり、ライバルである自由党の活力を奪い、結果として「自由党の没落」を促進したなどについては、たとえば Robert E. Dowse, *The Entry of the Liberals into the Labour Party 1910-1920, Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research* Vol. 13. No. 1. May 1961. 参照。

イギリス自由党はなぜ没落したか

- (15) C. Cook, *op. cit.*, p. 83.
- (16) Cf. J. Campbell, *op. cit.*, p. 20.
- (17) M. Cowling, *op. cit.*, p. 213.
- (18) 以上詳しくは、拙稿「スタンリー・ボールドウィンとイギリス保守党の再建——一九二二年カールトン・クラブ集會に至る政治過程——」(一)『同志社法学』第一四二号・第一四三号。
- (19) Cf. R. Douglas, *op. cit.*, p.161.
- (20) Cf. S. Koss, *op. cit.*, pp. 255-256.
- (21) Cf. T. Wilson, *op. cit.*, pp. 244-245.
- (22) T. Jones, *Lloyd George* (1951) p. 200.
- (23) あくまで一九一八年の「連立内閣」を支持し、ロイド・ジョージと提携して政局の運営にあたろうとした保守党指導者にはA・チャムベレン(A. Chamberlain)‘パークメンツ’バルフォア(Balfour)‘R・S・ホーン(R. S. Horne)‘J・マシントン・エヴンス(L. Worthington-Evans)などの人々がいた。(Cf. Sir Charles Petrie, *The Life and Letters of the Right Hon. Sir Austen Chamberlain* Vol. II. p. 206) けれども、カールトン・クラブ集會以後、党内反主流派に転じ、少なくとも一九二三年当時は主流派に対する公然たる批判勢力としてボナ・ローやS・ボールドウィンなどを悩ました。パークメンツなどは一九二二年の内閣をめぐって‘the second eleven’とか‘second class intellects’などいふことで懸念してゐたのである。
- (24) Cf. T. Wilson, *op. cit.*, pp. 249-252.
- (25) Cf. T. Wilson, *op. cit.*, pp. 245-249.
- (26) T. Wilson ed, *The Political Diaries of C. P. Scott 1911-1928* (1970) p. 433.
- (27) Cf. F. W. S. Craig, *British Electoral Facts 1885-1975* (1968) p. 12.
- (28) Cf. R. Jenkins, *op. cit.*, p. 496, J. Campbell, *op. cit.*, p. 41.
- (29) Letters from Lord Oxford to a Friend, quoted in R. Jenkins, *op. cit.*, p. 496, Cf. T. Wilson *op. cit.*, p. 261.
- (30) R. Jenkins, *op. cit.*, p. 496.

- (73) *The Liberal Magazine* January 1923. p. 12.
- (74) *The Liberal Magazine* April 1923, pp. 215-216.
- (75) *The Liberal Magazine* April 1923. p. 216.
- (76) T. Jones, *op. cit.*, p. 204.
- (77) *The Liberal Magazine* April 1923. pp. 209-210.
- (78) H. H. Asquith, *Memories and Reflections* p. 205.
- (79) C. Cook, *The Age of Alignment* p. 90. T. Wilson ed, *C. P. Scott's Diaries* p. 439, p. 443
- (80) *The Liberal Magazine* April 1923. pp. 210-214.
- (81) C. Cook, *op. cit.*, p. 91. *The Liberal Magazine* May 1923. p. 314.
- (82) Cf. *The Liberal Magazine* May 1923. p. 314.
- (83) *Daily Chronicle* 22 November 1922 in *The Liberal Magazine* April 1923 p. 213.
- (84) *The Liberal Magazine* April 1923 p. 213.
- (85) Cf. T. Wilson, *op. cit.*, p. 263.
- (86) Cf. J. Campbell, *op. cit.*, pp. 58-59.
- (87) J. Campbell, *op. cit.*, pp. 61-62.
- (88) C. Cook, *op. cit.*, p. 95.
- (89) Cf. J. Campbell, *op. cit.*, p. 55.
- (90) Cf. *The Liberal Magazine* April 1923. p. 217.
- (91) T. Wilson ed, *C. P. Scott's Diaries* p. 432. p. 432. J. Campbell, *op. cit.*, p. 62.
- (92) T. Wilson, *op. cit.*, p. 270.
- (93) C. Cook, *op. cit.*, p. 96.
- (94) Cf. C. Cook, *op. cit.*, pp. 96-98.
- (95) C. Cook, *op. cit.*, p. 99.

イギリス自由党はなぜ没落したか

同志社法学 三三卷三・四号

三三一 (七二五)

- (96) C. Cook, *op. cit.*, pp. 99-100.
- (97) 下院で多数をにぎっていたボールドウィンがなぜ危険を冒してまで総選挙に訴えたのかについては、これまでにいろいろ詮索され、またさまざまな解釈を生みだした(たとえは M. Cowling *op. cit.*, pp. 325-330)。しかしここでは一応本文に示したような見方をとることにする。これについては、たとえば J. Campbell, Stanley Baldwin, in J. P. Mackintosh ed *British Prime Ministers in the Twentieth Century* (1977) Vol. 1, p. 193, p. 197. 参照。
- (98) ボールドウィンが保護貿易政策にのみきつたものの経緯と当時のかれの心境を記述するものとして、たとえば Cf. Robert R. James, *Memoirs of a Conservative: J. C. C. Davidson's Memoirs and Paper 1910-1937* (1969) pp. 181-183, L. S. Amery, *My Political Life* Vol. II, pp. 280-281.
- (99) ロビン・シモンがはたして本心から保護貿易を掲げようとしていたのかどうかについては実は説のわかれるところではあるが、ここでは一応かれは条件次第によって保護貿易の立場をとろうとしていた、と言ふ考え方に従うことにする。この点については、たとえば Robert R. James, *op. cit.*, pp. 184-185, K. Middlemas & J. Barnes, *Baldwin* (1969) p. 220, H. Montgomery Hyde, *Baldwin* (1973) p. 181. 参照。ただし A. J. P. Taylor, *op. cit.*, p. 268. 都築忠七訳前掲書一八〇頁と C. Cook, *op. cit.*, p. 113. などによれば、むしろ見方は否定される。 J. Compbell, *Lloyd George* p. 48. もまた否定的である。
- (100) *The Liberal Magazine* December 1923. p. 764, K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, pp. 237-238.
- (101) J. Campbell, *op. cit.*, p. 72.
- (102) R. Douglas, *op. cit.*, p. 171.
- (103) R. Jenkins, *op. cit.*, p. 498, S. Koss, *op. cit.*, p. 262.
- (104) 以下 F. W. S. Craig, *op. cit.*, p. 13.
- (105) C. Cook, *op. cit.*, p. 179.
- (106) 自由党にとって一九二三年の総選挙がはたして「勝利」であったか否かについても説のわかれるところである。T・ウィルソンは、D・バターリー (D. Butler) など選挙学者の説を批判しつつ二三年の選挙は自由党の勝利、しかもアスキス派自由党の勝利であったと主張する (T. Wilson, *op. cit.*, pp. 275-276)。しかしT・ウィルソン自身も承認しているように、

この勝利には實際上非常な不安定性がつきまとったのであり (T. Wilson *op. cit.*, p. 283) これを議席数の増減などだけで単純に判断すると非常に大きな誤りを犯すことになるであろう。この点についてはなお数字をあげていちいち詳しく分析する必要はある。しかし、とりあえず筆者は、ここではT・ウィルソンの説とは逆に二三年において自由党は、実質的に敗北していたとみるC・クックの説に従いたいと思う。

C・クックによれば、今回自由党が勝利したように印象づけられるのは、地方部における四四議席の獲得による。しかしよく注意してみると、同党が勝利したこれらの地域は大体においていずれも投票率の低い地区であり、それをもともと同地域でかれらが保有していた議席を今回かろうじて保持したと言うことにすぎない。地方部における善戦にはノンコンフォーミスト票の動きの活発さもつけ加えられなければならないであろう。しかしいずれにせよ、かれらの「勝利」には右のような意味での消極性がつきまっていたのである。しかも重要なことはそれだけではない。それは同党がことに最大のライバル関係にある労働党に重要地域のいたるところで敗北したと言うことである。ノース・イーストやランカシャーの一部織物地帯などの例外はあるにせよ、とくにミッドランドなど従来からの拠点たる産業地帯や都市部などで、自由党は一樣に労働党に敗北した。つまり一九二三年に自由党は保守党地盤の大勢を動かすまでにいたらなかったし、同時に労働党には全然太刀打ちできなかった。これが現実であったのである。(Cf. C. Cook, *op. cit.*, pp. 156-179) したがって表面的な結果はともかくとして、自由党は二三年に時代の流れにとり残され、実質的には敗北していたと見る方がより真実に近いように思われるのである。この点は「自由党没落」の基本的な原因に関連するものであり、強調されなければならない点であると思われる。

- (107) C. Cook, *op. cit.*, p. 179. quoted in M. Cowling *op. cit.*, p. 347.
- (108) M. Cowling, *op. cit.*, pp. 342-343.
- (109) T. Wilson, *op. cit.*, pp. 270-271.
- (110) C. Cook, *op. cit.*, p. 148-149.
- (111) M. Cowling, *op. cit.*, p. 342.
- (112) S. Koos, *op. cit.*, p. 263.
- (113) Quoted in T. Wilson, *op. cit.*, p. 303.

イギリス自由党はなぜ没落したか

- (114) T. Wilson, *op. cit.*, pp. 304-305.
- (115) C. Cook, *op. cit.*, pp. 341-342.
- (116) 本文でも示したように二三年一二月の総選挙の結果は保守党二五八議席、労働党一九一議席、自由党一五八議席で保守党は第一党として相対的多数を占めていた。したがって、これだけをみれば保守党が政権を維持するのは必ずしもそれほど不自然ではなかった。ところが、一九二三年の総選挙は、保守党のポールドウィンが自由貿易主義にたつ自由党と労働党をむこうにまわして保護貿易主義をうちだし、しかもこれに敗北し絶対多数獲得に失敗した総選挙であった。つまり保守党はいかに相対的多数を占めていたとしても、「自由貿易」か「保護貿易」かと言う重大争点もちだされるとたちまち労働党と自由党の前に少数派の悲哀をかこつしかないのである。しかもポールドウィンは、ランカシャー保守党の動きにみられるように党内にも強力な自由貿易派の政敵をかかえていた。したがって、保守党があくまでも政権を維持するのはこのときは非常にむずかしかったのである。
- (117) こうした主張をした人々の政治的な動き方とかれらの構想については、たとえば Cf. M. Cowling, *op. cit.*, pp. 332-333, p. 384. C. Cook, *op. cit.*, pp. 180-182.
- (118) M. Cowling, *op. cit.*, p. 348.
- (119) M. Cowling, *op. cit.*, p. 387.
- (120) C. Cook, *op. cit.*, p. 183.
- (121) Robert R. James *op. cit.*, p. 189. Cf. A. W. Baldwin, *My Father: the True Story* (1956) pp. 124-125.
- (122) *The Liberal Magazine* January 1924 p. 20, T. Wilson *op. cit.*, p. 285.
- (123) *The Liberal Magazine* February 1924 pp. 126-127.
- (124) Thomas Jones, *Whitehall Diary* (1969) Vol. 1. p. 266.
- (125) Cf. T. Wilson ed, *C. P. Scott's Diaries* p. 450. C. Cook, *op. cit.*, pp. 185-188.
- (126) Quoted in R. Jenkins, *op. cit.*, p. 501.
- (127) Cf. T. Wilson ed, *C. P. Scott's Diaries* p. 450. C. Cook, *op. cit.*, pp. 189-190.
- (128) なおしばしば引用しているR・ダグラスは、自由党が労働党政権樹立を承認したことに關して批判して、この時点におい

ては自由党自身が政権をにぎるのが一番現実的であったし、またその可能性もあったと主張している。自由党は労働党にくらべて経験豊富な閣僚クラスの人材をそろえているし、それに保守党の不満分子ランカンチャーの自由貿易派なども「自由党政権」に追随する可能性があったと言うわけである (R. Douglas, *op. cit.*, p. 174)。しかしこのような解釈は本文に示したようなアスキスやロイド・ジョージの御都合主義的行動からすると、明らかに誤りである。自由党が政権をとる現実性も可能性もまったくなかったのである。なおこの点に関して R・ダグラス批判をするものとして S. Koss, *Asquith* pp. 264-265. 参照。

- (129) D. Marquand, *Ramsay MacDonald* (1977) pp. 283-291. M. Cowling, *op. cit.*, pp. 362-364.
- (130) J. Campbell, *op. cit.*, p. 88.
- (131) D. Marquand, *op. cit.*, p. 320.
- (132) T. Wilson, *op. cit.*, pp. 290-291. C. Cook, *op. cit.*, p. 219.
- (133) C. Cook, *op. cit.*, p. 219.
- (134) R. Douglas *op. cit.*, p. 178.
- (135) C. Cook, *op. cit.*, pp. 221-223. ただしロイド・ジョージ個人は選挙戦はおおいに望むところであった。この点について 註 J. Campbell, *op. cit.*, p. 89.
- (136) 註 T. Wilson, *op. cit.*, pp. 293-294.
- (137) 以下の展開をめぐり C. Cook, *op. cit.*, pp. 214 ff. からアイデアをえた。
- (138) Quoted in R. W. Lyman, *The First Labour Government 1924* (1957) pp. 235-236.
- (139) 詳しくは 註 *The Liberal Magazine* August 1924 pp. 459-462. 参照。
- (140) C. Cook, *op. cit.*, p. 233.
- (141) Cf. T. Wilson, *op. cit.*, pp. 309-311.
- (142) T. Wilson, *op. cit.*, pp. 305-307.
- (143) S. Koss, *op. cit.*, p. 267.
- (144) C. Cook, *op. cit.*, p. 224.

- (145) 「ポプラー討論」とそれについてのアスキスなどの意見表明については詳しくは *The Liberal Magazine* March 1924 pp. 137-138, p. 165, p. 175, p. 182. 参照。
- (146) 以上すべて C. Cook *op. cit.*, pp. 235-249.
- (147) 以下の展開はすべて C. Cook, *op. cit.*, pp. 251 ff. からアイデアをえた。
- (148) Cf. T. Wilson, *op. cit.*, pp. 312-313.
- (149) J. Campbell, *op. cit.*, p. 99. なお「ロイド・ジョージ基金」引きだしをめぐる交渉の説明については、これまで注に引用してきた歴史家たちに関しても、アスキスに好意的な立場をとるかそれともロイド・ジョージを評価する立場をとるかによってそれぞれある種の感情をおさえることができず筆をとっているようである。たとえば T・ウィルソンなどによると、問題の責任はひとえにロイド・ジョージが負うべきであるとされた。T・ウィルソンは述べて、ロイド・ジョージがアスキスに金をわたさなかったのは「おそらく深い理由からではなく、ただ（かれが）金を握っていたかたから……」（つまり、ロイド・ジョージと言う人間は）いったん現金を握ったら決して離そうとはしない典型的なウェールズの小百姓」なのだ、ときめつけられるのである（Cf. T. Wilson, *op. cit.*, pp. 322-323）しかしながらロイド・ジョージ側にとって問題を見ると、当然のことながら右のように評価するだけで必ずしもことはすまされない。ロイド・ジョージがこの問題について狭量であったのはたしかに事実であった。だが当時のアスキスが党再建の長期的展望をもたず、党再建にはどの程度の財源が必要なのかと言うようなことについてまったく無知であったことも事実なのである。なにしろアスキスは、当時「国王より皇室的で法王よりカソリック的」であると言われており、党再建のための実務的プログラムなど明示しうるような人物ではなかったのである（以上 Cf. R. Douglas, *op. cit.*, p. 184）これでは「基金」を出す方が非常な不安にかられたのもまたやむをえないことであつたと言えよう。こうして、この問題に関する二人の行動の評価は必ずしも定まらない。ただ以上のようにしてみると問題の責任はやはり二人のどちら側にもあつたと解釈するのが無難なのではないだろうか。
- (150) T. Wilson, *op. cit.*, p. 323.
- (151) T. Wilson, *op. cit.*, p. 314.
- (152) C. Cook, *op. cit.*, pp. 257-258.
- (153) C. Cook. *A Short History of the Liberal Party 1900-1976* p. 102

- (154) C. Cook, *The Age of Alignment: Electoral Politics in Britain 1922-1929* pp. 257-262.
- (155) C. Cook, *Ibid.*, p. 214.
- (156) 一九二四年における各政党指導者を考えるとき、S・ボールドウィンほど辛い立場にあった人間はいないであろう。二二年の「カールトン・クラブ集会」で一躍政局の中心におどりてたかれも党内ではつねに政敵たる長老グループから失脚を画されており、しかも二三年の総選挙では敗北して政権を労働党にわたさざるをえなかったと言う非常な苦境に陥いた。しかしそれにもめげず、かれはまず苦心してA・チェンバレンやバークンヘッドなど党長老グループを宥和し党の分裂回避に努めた(以上の経緯については、とりあえず L. S. Amery, *op. cit.*, Vol. II, pp. 282-283. M. Hyde, *op. cit.*, pp. 200 ff. などを参照)。そのうえ、かれはN・チェンバレンなどの助けをかりて保守党「陰の内閣」の充実化、専門家からなる党内委員会制度の充実、党の下部組織の整備など着々と党再建にのりだしたのである(これについては J. Ransden, *The Age of Balfour and Baldwin 1902-1940* 1978. Chapter 9. 10. 11. が非常に詳しい分析を展開している)。しかもボールドウィンの行動はこれだけにはとどまらなかった。かれは、同年五月から六月にかけさらに「新保守主義」とよばれる一大政策キャンペーンに精力的に乗りだし、保守党再建を国民に印象づけたのである(以上については、たとえば Cf. K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, pp. 265-268)。こうした努力は、おそらくアスキスやロイド・ジョージのときもおよぼさるるではなかったと言って過言でなからう。
- (157) 総選挙でラジオがはたした役割については、とりあえず Cf. K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 275. R. W. Lyman, *op. cit.*, p. 266.
- (158) 一九二四年総選挙における反共宣伝の大合唱については、たとえば R. W. Lyman, *op. cit.*, pp. 256 ff, C. Cook, *op. cit.*, p. 300.
- (159) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 275.
- (160) Cf. R. W. Lyman, *op. cit.*, p. 268. C. Cook, *op. cit.*, pp. 301-302.
- (161) R. W. Lyman, *op. cit.*, pp. 252-253.
- (162) Cf. F. W. S. Craig, *op. cit.*, p. 14.
- (163) C. Cook, *op. cit.*, p. 316.

イギリス自由党はなぜ没落したか

- (161) Cf. *The Liberal Magazine* November 1924, pp. 692 ff.
- (162) R. W. Lyman, *op. cit.*, p. 266.
- (163) T. Wilson, *op. cit.*, pp. 328-329.
- (164) 以上を引く T. Wilson, *op. cit.*, pp. 327-329. なおマスキスは、ペイズリーの政治的条件がいかに困難であったかと言う点について回想して、同地区は地理的にもクライド・サイド地帯にあり、スコットランド西部工業地帯における練達の社会主義者たちによる格好の活動の場であり、なまなかなことと言うことを聞くようなところではなかった、などと述べている (H. H. Asquith, *Memories and Reflections* p. 179)。それはたしかにそうであったかも知れない。しかし一九二二年から二四年にわたる選挙におきいて、自由党にとって困難な地域がペイズリーだけに限られなかったことはもとより言うまでもない。苛酷な条件に直面していったのはマスキスだけではなかったのである。

- (165) C. P. Scott's *Diaries* pp. 467-468.
- (166) H. H. Asquith, *Memories and Reflections* p. 213.
- (167) C. Cook, *A Short History of the Liberal Party 1900-1976* p. 105.
- (168) 以下 R. Jenkins, *op. cit.*, pp. 514-515.
- (169) Cf. S. Koss, Asquith versus Lloyd George, in A. Sked and C. Cook ed, *Crisis and Controversy: Essays in Honour of A. J. P. Taylor* pp. 84-85.
- (170) R. Jenkins, *op. cit.*, p. 516.
- (171) S. Koss, *op. cit.*, p. 86. なお一九二〇年代における自由党の状況に対する対応全般については、前出の J. Campbell, *The Renewal of Liberalism: Liberalism without Liberals*, in Gillian Peele & C. Cook ed *The Politics of Reappraisal 1918-1939* pp. 88 ff. 参照。
- (172) R. Jenkins, *op. cit.*, pp. 517-9.
- (173) 以下 J. Campbell, *op. cit.*, p. 209.